

ひろがさく
千葉市広々作遺跡

— 令和元年度発掘調査報告書 —

2023

株式会社 かまとり住宅
千葉市教育委員会
株式会社 勾玉工房

例言

1. 本書は千葉市若葉区小倉町1758番地1ほかに所在する、広ヶ作遺跡令和元年度発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社かまどり住宅から委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi（現：株式会社勾玉工房）が千葉市教育委員会の指導のもとに行ったものである。
3. 調査期間及び組織は次のとおりである。

調査期間	発掘調査	令和2年3月2日から令和2年3月31日
調査対象面積		254 m ²
調査主体者		千葉市教育委員会
調査担当者		白根義久 千葉市埋蔵文化財調査センター
調査支援		有限会社勾玉工房 Mogi（現：株式会社勾玉工房） 代表取締役 大賀 健
発掘作業	調査員	津田芳雄 調査研究員・日本考古学協会員 篠原仁史 調査研究員 山室 敦 調査研究員 大賀庸平 調査研究員
	作業員	和田史子 梅田茂子 土屋信子 有限会社カワヒロ産業
整理作業	調査員	橋邊明子 高梨綾子 大賀琢磨 高橋 豪
	作業員	佐藤政代、篠原美代子、村上恭子

4. 本書に用いた基準杭は世界測地系第IX系である。遺構図面は60分の1、30分の1で掲載したが一部80分の1図も使用した。各図にはスケールを掲載している。遺物実測図は3分の1で掲載したが、微細な石器類は3分の2で掲載した。
5. 本書に用いた遺跡の位置図2万5000分の1は国土地理院『千葉』を用いた。また周辺の遺跡及び立地については、千葉市都市計画図2000分の1図を用いた。
6. 掲載図面に用いたトーンは以下のとおりである。

遺構  …炉  …焼土範囲  …火床面
 …上層具範囲  …下層具範囲

7. 遺物の水洗いはすべての遺物に対して行った。また遺物注記は注記マシーンを用い、微細なものはビニールに入れて表記した。
8. 縄文土器の分類・土器型式比定は橋邊明子が担当した。
9. 本書は大賀 健監修のもと、第1章第1節を千葉市教育委員会が、第2章を米山聡一、第3章を大賀 健、第5章2節高梨綾子、その他を橋邊明子が執筆した。
編集は大賀琢磨・高橋 豪が行った。
10. 本遺跡出土の貝類の分析は千葉市埋蔵文化財調査センター所長西野雅人氏に依頼した。
11. 本遺跡の出土遺物・資料類は、千葉市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査ならびに本書作成に至る過程で次の方々や機関から御助言・御協力を賜った（順不同）
千葉市教育委員会、有限会社天田安平商店、有限会社カメラのズギハラ、株式会社都重機建設

目次

目次・例言・目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の立地	1
第3章 調査方法並びに調査の経過	3
第1節 調査の方法	3
第2節 調査の経過	4
第3節 標準堆積土層	4
第4章 調査の成果	5
第1節 遺跡の概要	5
第2節 1区	6
第3節 2区	13
第4節 3区	20
第5節 4区	27
第6節 5区	29
第7節 6区	34
第5章 まとめ	39
第1節 埋甕について	39
第2節 SI02 覆土から検出された石鍬製作跡関連資料について	40
第3節 広ヶ作遺跡と加曾利貝塚	40
第4節 貝サンプルの分析結果	43

表目次

第1表 新旧遺構番号対応表	4	第10表 SI02内ビット一覧表	20
第2表 SI01内ビット一覧表	6	第11表 SI02出土遺物観察表(1)	25
第3表 SI01出土遺物観察表(1)	10	第12表 SI02出土遺物観察表(2)	26
第4表 SI01出土遺物観察表(2)	11	第13表 SI02出土遺物観察表(3)	27
第5表 SI01出土遺物観察表(3)	12	第14表 SK02出土遺物観察表	28
第6表 SI01出土遺物観察表(4)	13	第15表 SI03出土遺物観察表	33
第7表 2区遺物包含層出土遺物観察表	15	第16表 SI04出土遺物観察表	37
第8表 SK04・SK05出土遺物観察表	17	第17表 SK03出土遺物観察表	38
第9表 2区63トレンチ遺物包含層 出土遺物観察表	19	第18表 SK06出土遺物観察表	38
		第19表 遺構一覧表	42

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡図	第17図 SI02 出土遺物 (1)	22
第2図 遺跡位置図	第18図 SI02 出土遺物 (2)	23
第3図 確認調査トレンチ配置図	第19図 SI02 出土遺物 (3)	24
第4図 基本層序	第20図 SK02	27
第5図 全体測量図	第21図 SK02 出土遺物	28
第6図 SI01	第22図 SI03	29
第7図 SI01 出土遺物 (1)	第23図 SI03 出土遺物 (1)	30
第8図 SI01 出土遺物 (2)	第24図 SI03 出土遺物 (2)	31
第9図 SI01 出土遺物 (3)	第25図 SI03 出土遺物 (3)	32
第10図 2区遺物包含層	第26図 SI04・SK03・SK06	35
第11図 2区包含層出土遺物	第27図 SI04 出土遺物	36
第12図 SK04・SK05 同出土遺物	第28図 SK03 出土遺物	37
第13図 2区 63 トレンチ 出土遺物 (1)	第29図 SK06 出土遺物	38
第14図 2区 63 トレンチ 出土遺物 (2)	第30図 検出された埋喪	39
第15図 2区 63 トレンチ 出土遺物 (3)	第31図 SI02 石器分布図	41
第16図 SI02		21

図 版 目 次

図版 1	図版 5
1. 確認調査前風景 北西から	1.2区 60・63 トレンチ 遺構検出状況
2.1区 65 トレンチ SI01 炉検出状況	北西から
北西から	2.2区 60・63 トレンチ 埋喪出土状況 (1)
3.2区 65 トレンチ SI01 検出及び拡張状況	北西から
南東から	3.2区 60・63 トレンチ 埋喪出土状況 (1)
4.2区 63 トレンチ SK04・05 検出状況	北西から
北西から	4.2区 60・63 トレンチ 遺物出土状況 (1)
5.2区 63 トレンチ 拡張状況 北から	北から
図版 2	5.2区 60・63 トレンチ 遺物出土状況 (2)
1.3区 36 トレンチ SI02 検出状況 北西から	南東から
2.3区 36 トレンチ SI02 拡張状況 南から	図版 6
3.4区 31 トレンチ SK02 検出状況 北西から	1.2区 包含層 完掘状況 北から
4.5区 17 トレンチ SI03 検出状況 北西から	2.2区 SK04 完掘状況 東から
5.5区 17 トレンチ 拡張状況 南から	3.2区 SK04 セクション 南から
6.6区 18 トレンチ SI04 検出状況 北西から	4.2区 SK05 完掘状況 東から
7.6区 18 トレンチ 拡張状況 北西から	5.2区 SK05 セクション 西から
8.6区 18 トレンチ 拡張状況 北西から	図版 7
図版 3	1.3区 36 トレンチ 遺構検出状況 北西から
1. 本調査前風景 北西から	2.3区 SI02 完掘状況 南から
2.1区 65 トレンチ 遺構検出状況 北西から	図版 8
図版 4	1.3区 SI02 Aセクション 西から
1.1区 65 トレンチ 遺物出土状況 北から	2.3区 SI02 Bセクション 南から
2.1区 65 トレンチ 埋喪出土状況 北から	3.3区 SI02 遺物出土状況 (1) 西から
3.1区 SI01 完掘状況 西から	4.3区 SI02 遺物出土状況 (2) 東から
4.1区 SI01 Aセクション 西から	5.3区 SI02 遺物出土状況 (3) 北から
5.1区 SI01 Bセクション 北から	

- 図版 9
- 1.4区 31 トレンチ 遺構検出状況 南東から
 - 2.4区 SK02 完掘状況 北から
 - 3.4区 SK02 セクション 東から
 - 4.4区 SK02 埋甕出土状況 南東から
 - 5.4区 検出状況 南から

- 図版 10
- 1.5区 17 トレンチ 遺構検出状況 南東から
 - 2.5区 SI03 完掘状況 北から

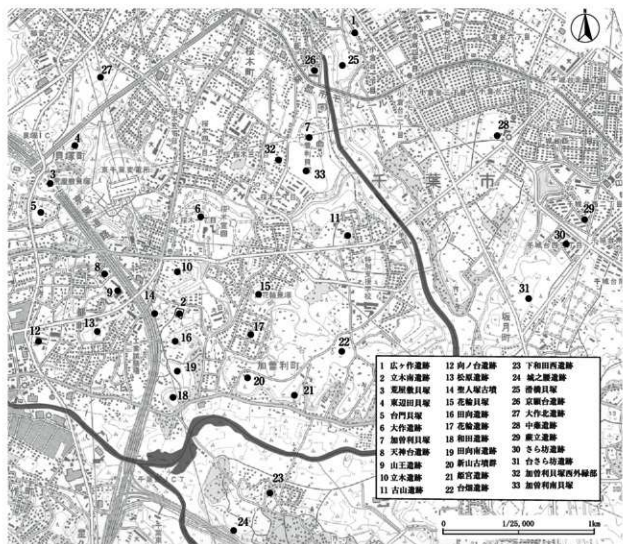
- 図版 11
- 1.5区 SI03 Aセクション 南から
 - 2.5区 SI03 Aセクション 北から
 - 3.5区 SI03 Bセクション 東から
 - 4.5区 SI03 Bセクション 西から
 - 5.5区 SI03 貝出土状況 西から
 - 6.6区 SI03 埋甕出土状況 (1) 北から
 - 7.5区 SI03 埋甕出土状況 (2) 南から
 - 8.5区 SI03 炉完掘状況 北から

- 図版 12
- 1.6区 18 トレンチ 遺構検出状況 北西から
 - 2.6区 SI04・SK03・06 完掘状況 北から

- 図版 13
- 1.6区 SI04 Aセクション 東から
 - 2.6区 SI04 Bセクション 北から
 - 3.6区 SI04 炉 セクション 西から
 - 4.6区 SI04 炉 完掘状況 東から
 - 5.6区 SI04 埋甕出土状況 北から
 - 6.6区 SI04 遺物出土状況 東から

- 図版 14 1区 SI01 出土遺物 (1)
- 図版 15 1区 SI01 出土遺物 (2)
- 図版 16 1区 SI01 出土遺物 (3)
- 2区 包含層出土遺物
- 2区 SK04・05 出土遺物

- 図版 17 2区 63 トレンチ出土遺物 (1)
- 図版 18 2区 63 トレンチ出土遺物 (2)
- 図版 19 SI02 出土遺物 (1)
- 図版 20 SI02 出土遺物 (2)
- 図版 21 4区 SK02 出土遺物
- 5区 SI03 出土遺物 (1)
- 図版 22 5区 SI03 出土遺物 (2)
- 図版 23 5区 SI03 出土遺物 (3)
- 図版 24 6区 SI04 出土遺物
- 図版 25 6区 SK03 出土遺物
- 6区 SK06 出土遺物



第1図 周辺遺跡図

第1章 調査に至る経緯

令和元年7月26日付けで、株式会社かまどり住宅（以下、事業者という）から、千葉市若葉区小倉町1758番1他について、宅地造成に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について」が千葉市教育委員会教育長あてに提出された。事前の試掘調査で竪穴建物跡を確認していることから同年8月7日付け31千教埋セ第171号にて、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

その後、事業者より対象地（面積5,463.1㎡）について「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、同年9月3日付け31千教埋セ第210号にて千葉県教育委員会教育長宛て報告し、同年9月17日～10月11日の日程で千葉市埋蔵文化財調査センターが確認調査を実施した。

その結果、縄文時代住居跡などが検出されたため、同年10月15日付け31千教埋セ第278号にて、調査面積のうち、254㎡を本調査対象範囲として継続協議が必要の旨、事業者宛に通知した。

協議の結果、本調査対象範囲の記録保存のための本調査を実施することとなった。本調査は、令和元年12月12日付けで、事業者より、「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、依頼者の委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi の支援のもと、千葉市教育委員会が主体者となり、令和2年3月2日から3月31日まで発掘調査を実施した。

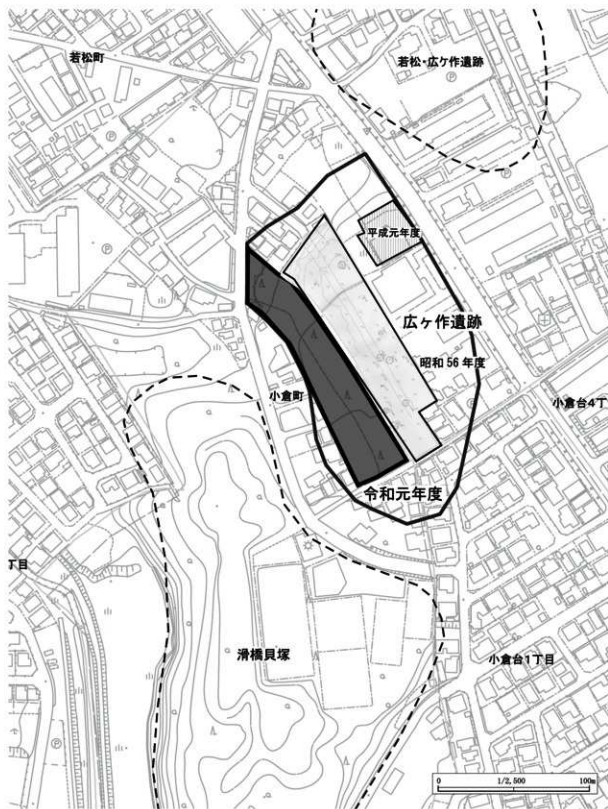
第2章 遺跡の立地

本遺跡が所在する小倉町周辺は、都川の上流域で坂月川と分岐し複雑な樹枝状地形を作りだす。この坂月川の西岸には国の特別史跡加曽利貝塚や東岸には滑橋貝塚、広ヶ作遺跡（貝塚）など縄文時代中期後半～後期の貝塚が点在することが知られている。本遺跡の位置する台地上の標高は27m前後で下位水田面との比高は約15m。縄文中期の後半段階ではやや海から遠ざかった位置になるようである（註1）。

本遺跡は、1983年に広ヶ作遺跡調査会によって初めて本格的調査が実施されている。加曽利EⅢ式から加曽利EⅣ式への移行期の集落として捉えられ、検出した7軒の竪穴建物跡からはいずれからも貝層が検出されており、東京水産大学の奥谷喬司教授による分析がなされている（註2）。

註1 令和2年3月千葉市貝塚博物館紀要に西野（2020）がまとめた、広ヶ作遺跡出土品の分析結果で詳細が報告されている。

註2 平岡和夫ほか編 1984『広ヶ作遺跡調査報告』千葉市遺跡調査会



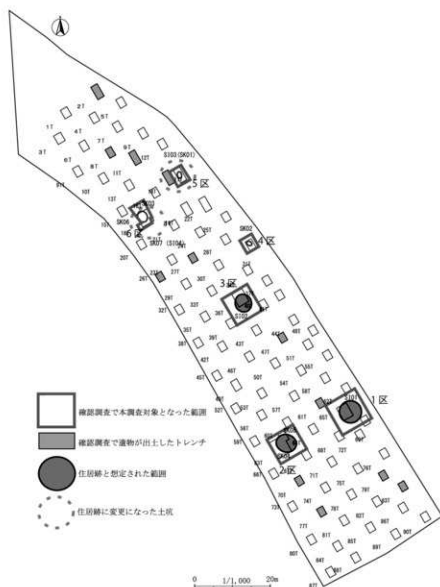
第2図 遺跡位置図

第3章 調査方法並びに調査の経過

第1節 調査の方法

確認調査

対象地（面積5,463.1㎡）に対し、令和2年9月17日～10月11日の日程で千葉市教育委員会が確認調査を実施した。その際、4m×2mの坪掘りトレンチを90箇所設定、掘り下げをおこなった。深さは地点によって異なるが、遺構が確認できる0.4m前後まで掘削、排土はトレンチ脇に置いた。なお、6地点において遺構・遺物が検出された。このため、当該地点を1～6区と呼称し、本調査対象範囲をバックホウによって拡張する形で表土掘削、遺構または遺物の集中が確認できる範囲を広げた。



第3図 確認調査トレンチ配置図

本調査

- (1) 調査面積のうち、254 m²を本調査対象範囲とし、調査を行った。
- (2) 千葉県教育委員会が設定した調査用任意杭 6 本を基点に測量・図化を行った。なお、任意杭、並びに各調査区については、整理事業時、世界測地系座標に移設した。
- (3) 確認調査の時点で土坑と判断したものが住居跡に変更されたものもあるため、以下に新旧遺構番号対応表を示す。
- (4) なお、これらの番号の変更は整理事業段階で変更したため、注記、並びに遺構写真の写し込み番号も旧番号のままになっている。

第1表 新旧遺構番号対応表

区番号	新遺構番号	旧遺構番号	備考
1区	S101	S101	
2区	SK05・04・包含層	SK05・04・包含層	
3区	S102	S102	
4区	SK02	SK02	千葉県教育委員会調査
5区	S103	SK01	
6区	SK03・SK06・S104	SK03・SK06・SK07	

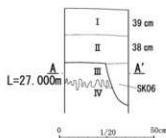
第2節 調査の経過

2020年

- 3月3日 調査を開始し、バックホウによって調査対象地点の遺構範囲の表土剥ぎを実施する。2区より調査に着手し、縄文土器の分布を示す包含層1か所と土坑2基を検出した。
- 3月6日 1区の遺構検出作業に取り掛かる。また、3区SK02の調査を終了する。
- 3月9日 2区SK04・SK05の調査を行い終了する。同土坑から縄文土器が出土し、周囲の包含層との関連が想定された。
- 3月11日 2区包含層調査を終了。同日S102の調査を開始する。
- 3月12日 5区のSK01の調査に着手する。
- 3月13日 SK01から貝が検出され貝層を残して周辺の拡張を進める。
- 3月27日 SK07の埋甕の調査を完了し、本遺跡の全調査を終了する。

第3節 標準堆積土層

標準堆積土層は3区SK06断面において行った。基本層序は一次調査と変化はなく、I層が表土層、II層は黒色土層、III層が漸移層並びにソフトローム層で、IV層は立川ローム層上面のハードロームとなり、北総台地の標準的堆積を見せる、遺構の確認面はソフトローム上面または漸移層面で標高27m。



第4図 基本層序

土層番号	内容
I層	7.5YR2/1 黒色土 表土
II層	10YR4/4 黒色土
III層	ソフトローム
IV層	ハードローム

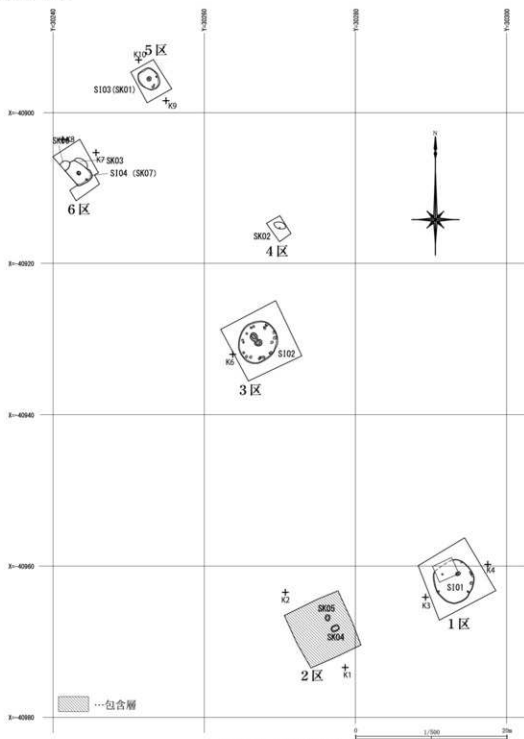
第4章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

今回の調査で検出された遺構・遺物は次のとおりである。

【遺構】 竪穴建物跡4軒、土坑3基

【遺物】 縄文時代中期後葉～後期前葉の土器（加曾利EⅢ・Ⅳ式、称名寺式、堀之内Ⅰ・Ⅱ式、後期安行式）、石器



第5図 全体測量図

第2節 1区

第1項 竪穴建物跡 (SI01) (第6図 図版4)

平面形状はやや南北に長い楕円形を呈する。規模は長軸(5.3)m、短軸5.2m、深さ10cmを測る。覆土は6層に分層した。いずれも自然堆積を示す。竪穴壁は南東側でほぼ直立するが、北西側では緩やかな立ち上がりとなっている。床面は中央部分がやや低くなるもののほぼ平坦で、床面中央付近の標高は28.4mを測る。床面は標準土層のⅢ層中に構築されるもので、軟質であるが中央付近では踏み固められている。

柱穴はP2～P4が3基重なるが、他はほぼ一定の間隔で壁際に並び、11基が検出されている。各ピットの計測値は表にまとめている。P1・P7を結ぶ線が中軸の線で各ピットは亀甲形に配置される、東壁中央部分に位置するP2～P4は出入口施設の設置の可能性がある。

炉は隅丸長方形で主軸方向は東西方向となる。床面から15cmほど掘りくぼめられたもので、火床面は被熱によって硬化している。炉内から遺物の出土はない。

出土土器(総数135点、総重量5765.6g)は、加曾利EⅢ式古段階から後期安行式までの破片多数が認められる。ただし、後期土器群は覆土混入品として捉えた。

1は、北西壁よりにおいて確認調査時に出土したものであるが、床面下に掘り込まれた所謂埋め巻である。形状は小さな底部で弧形を呈する。胴部の文様帯には上下両方をS字またはU字の区画文によって連結されている。区画内には縄文Ⅷが施文されたのち、周縁を磨り消している。この手法は称名寺I式へ移行する直前段階と考えられ、加曾利EⅣ式と想定できる。24・29・38・39等もU字に屈曲する文様の頂部が平坦化しており、新しい様相を見せている。一方で、2は沈線区画帯が三角形に尖るもので、加曾利EⅣ式の典型といえよう。SI01は埋壙1から判断して加曾利EⅣ式と判断される。一方で第9図61・62の土器は加曾利B2式後期中葉土器が含まれる。

この他にも、土製円盤、チャート製石器がある。なお、本遺構の帰属は、覆土出土土器の主体を占める加曾利EⅣ式新段階頃に考えたい(註)。

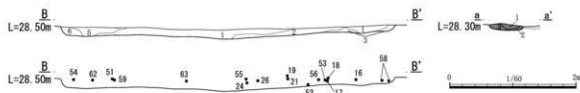
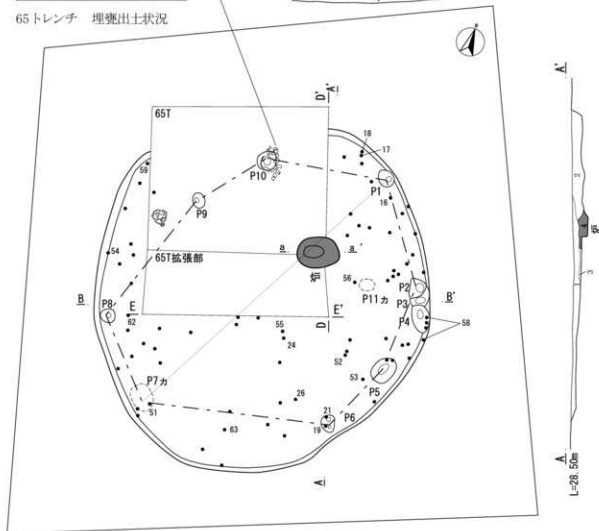
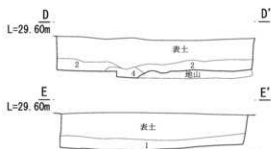
註 2006 柳沢清一『縄文時代中・後期の編年学研究：列島における小規模編年網の構築を目指して』千葉大学考古学研究所叢書 3

第2表 SI01内ピット一覧表

ピット番号	平面形状	長軸	短軸	深さ	備考
P1	楕円	27	25.2	26.5	
P2	不整形円形	29.8	25.9	29.4	
P3	—	—	27.7	12.1	
P4	長楕円	43.4	26.4	22.9	遺物18
P5	長楕円	43.1	31.7	9.8	
P6	長楕円	26.7	207	19.87	2段
P7カ	—	—	—	—	
P8	円	22.9	21.2	11.1	
P9	楕円	24.2	18.2	8.3	
P10	不整形円形	29.3	29.2	—	
P11カ	不整形円形	24.9	17.9	—	
0*	楕円形	65.3	47.9	19.5	

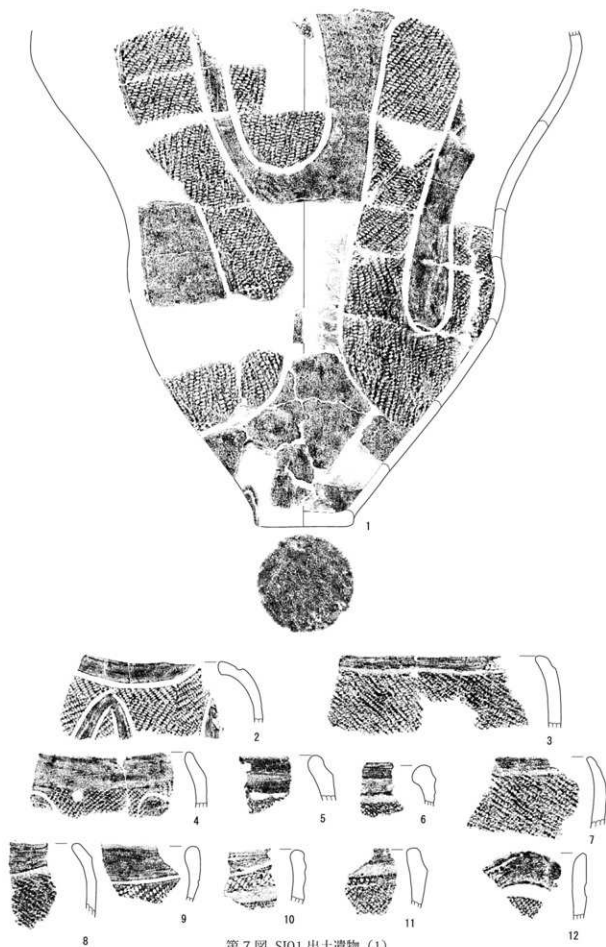


65トレンチ 埋発出土状況



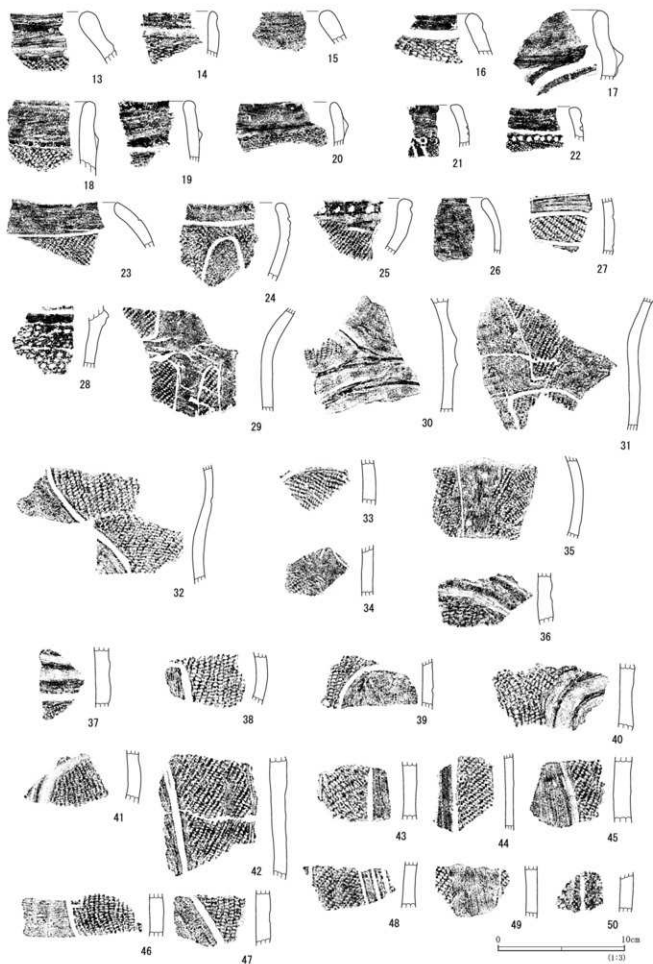
- | | | | | |
|------------------|-----------------------|----------|----------------------|-----------------------------|
| 1層 7.0185/2 灰褐色土 | ローム粒子中量、しまりややあり、粘性あり | 9f | 1層 5185/4 12.554赤褐色土 | ローム多量、焼土粒少量、しまりややあり、粘性ややあり |
| 2層 7.0187/2 明褐色土 | ローム粒多量、しまりあり、やや粘性あり | | 2層 5185/4 12.554赤褐色土 | ローム粒多量、焼土粒多量、しまりややあり、粘性ややあり |
| 3層 7.0185/2 灰褐色土 | ローム粒多量、しまりあり、粘性ややあり | | 3層 5186/4 12.554赤褐色土 | ローム粒多量、しまりややあり、粘性ややあり |
| 4層 7.0184/6 褐色土 | ローム粒多量、焼土粒、しまりあり、粘性あり | 9fに関係する土 | | |
| 5層 7.0183/2 黒褐色土 | ローム粒中量、しまりややあり、粘性ややあり | | | |
| 6層 7.0184/3 褐色土 | ローム粒中量、しまりややあり、粘性あり | | | |

第6図 SI01

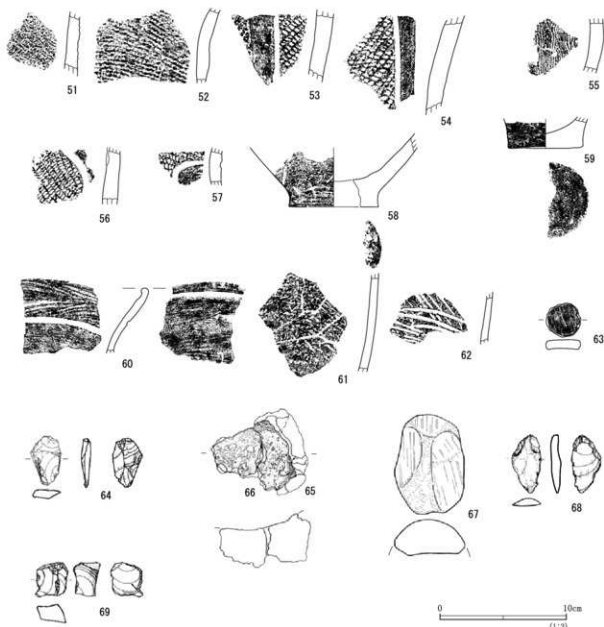


第7图 S101出土遗物(1)

0 10cm
1:30



第8図 S101 出土遺物 (2)



第9図 SI01 出土遺物 (3)

第3表 SI01 出土遺物観察表 (1)

出土番号	種類	図録	西存	重量	形式	地文	成形の特徴	胎土	色調	地質	材質	備考
1	織文土器	深鉢	完形	2713.9	加曽利 ⅤⅣ	ⅡⅡ織 中位Ⅱ 斜め	器形はキャリパー型を呈し沈線により区画され、区画内は織文がすり透される	白色粘 小礫 透明粒	内：2.53R/7にぶい赤褐色 外：09R/4にぶい褐色	良好		半球形無 文
2	織文土器	深鉢	口縁部 片	85.9	加曽利 ⅤⅣ	ⅡⅡ織	口縁は直状を呈する。口切は無紋帯を有し、沈線が一部する。以下は織文が充填され、沈線によって器形模様が見られる	白色粘 透明粒 赤色粒	内外：53R/6明赤褐色	良好		
3	織文土器	深鉢	口縁部 片	122.6	加曽利 ⅤⅣ～ Ⅴ	ⅡⅡ織	口縁は直状を呈する。口切は無紋帯を有し、沈線が一部する。以下は織文が充填される	白色粘 赤色粒 透明粒 黒色粒	内外：103R/2 灰黄褐色	良好		
4	織文土器	深鉢	口縁部 片	71.5	加曽利 ⅤⅣ	ⅡⅡ織	口縁は直状を呈する。口切は無紋帯を有する。以下は織文が充填され、沈線によって文字が掘られる	白色粘 砂粒 透明粒	内外：7.53R/4にぶい褐色	良好		
5	織文土器	深鉢	口縁部 片	24.9	加曽利 ⅤⅣ～ Ⅴ	ⅡⅡ織	文様帯は隆帯によって区画され、織文が充填される	白色粘 透明粒 砂粒	内：103R/2 灰黄褐色 外：103R/5 2 灰黄褐色	やや軟 質		

第4表 S101 出土遺物観察表(2)

調査番号	種類	器種	残存	重量	型式	地名	成型の特徴	胎土	色調	地質	材質	備考
6	縄文土器	深鉢	口縁部片	18.9	加曾利 EⅢ～ IV	EⅢ・EⅣ	口縁は直状を呈するが、隆線によって区画され縄文が充填される。	白色粘 透明粘 砂粒	内外：S106/4 に近い褐色	良好		
7	縄文土器	深鉢	口縁部片	67.9	加曾利 EⅣ	EⅢ・EⅣ	口縁は直状を呈する。口辺は無紋帯を有し、沈線が一帯する。以下は縄文が充填される。	白色粘 雲母 透	内外：T.5106/3 に近い褐色	良好		
8	縄文土器	深鉢	口縁部片	30	加曾利 EⅣ	無筋I Ⅲ	口縁は直状を呈し、微隆起線が一帯し、以下は縄文が充填される。	白色粘 内：10106/2 灰黄褐色 角閃石 外：10107/4 に近い黄褐色 黒色粘	良好			
9	縄文土器	深鉢	口縁部片	30	加曾利 EⅢ～ IV	R1・EⅣ	口縁は直状を呈する。口辺は無紋帯を有し、沈線が一帯する。以下は縄文が充填される。	白色粘 赤色粘 外：10106/2 灰黄褐色 内：10106/3 に近い黄褐色 砂粒	良好			
10	縄文土器	深鉢	口縁部片	27		R1・EⅣ	太沈線によって区画される。	白色粘 赤色粘	内：10106/2 灰黄褐色 外：T.5107/2 灰褐色	良好		
11	縄文土器	深鉢	口縁部片	26.9		EⅢ・EⅣ 別状に 縄文さ れる	口辺は無紋帯を有し、隆線が取り付けれ、縄文が施される。	白色粘 赤色粘 砂粒 小礫	内外：10106/3 に近い黄褐色	良好		
12	縄文土器	深鉢	口縁部片	33		R1・EⅣ	口縁は直状を呈し、太沈線によって区画され、縄文が充填される。	白色粘 透明粘	内：T.5106/3 に近い褐色 外：T.5105/4 に近い褐色	良好		波道部
13	縄文土器	深鉢	口縁部片	35.2	加曾利 EⅢ～ IV	R1・EⅣ	口辺は無紋帯を有し、微隆起線によって区画され、以下縄文が充填される。	白色粘 小礫 透明粘	内外：S105/4 に近い赤褐色	良好		
14	縄文土器	深鉢	口縁部片	17.4		無筋I Ⅲ	口辺は無紋帯を有し、微隆起線によって区画され、以下縄文が充填される。	白色粘 砂粒	内外：S105/6 明赤褐色	今令状 部手		
15	縄文土器	深鉢	口縁部片	18.9		R1・EⅣ	口辺は無紋帯を有し、以下縄文が充填される。	白色粘 透明粘	内外：S104/3 に近い赤褐色	良好		
16	縄文土器	深鉢	口縁部片	27.1	加曾利 EⅢ～ IV	R1・EⅣ	口辺は無紋帯を有し、以下縄文が充填される。	白色粘	内外：T.5105/8 明褐色	良好		
17	縄文土器	深鉢	口縁部片	60.2	加曾利 EⅢ～ IV	-	二重隆線によって円形模様を描かれる。	赤色粘 白色粘	内外：10104/3 に近い黄褐色	良好		
18	縄文土器	深鉢	口縁部片	53.9	加曾利 EⅢ～ IV	EⅢ・EⅣ	口辺は幅広い無紋帯を有し、微隆起線によって区画され、以下は縄文が充填される。	赤色粘	内外：10107/6 明黄褐色	良好		
19	縄文土器	深鉢	口縁部片	26	加曾利 EⅢ～ IV	-	口辺は幅広い無紋帯を有し、微隆起線によって区画される。	砂粒	内：10103/2 赤褐色 外：10105/6 黄褐色	良好		
20	縄文土器	深鉢	胴部	31.3	加曾利 EⅢ～ IV	R1・EⅣ	口辺は無紋帯を有し、微隆起線が一帯し、以下縄文が充填されたもの、横位の帯が描かれる。	白色粘	内外：10104/1 褐色	良好		
21	縄文土器	深鉢	口縁部片	32.9	透弘文 系	EⅢ・EⅣ	口辺は無紋帯を有し、微隆起線によって直状の文様が描かれる。平織竹葉による別状が穿たれる。	砂粒砂	内：10104/2 灰黄褐色 外：10105/4 に近い黄褐色	良好		
22	縄文土器	深鉢	口縁部片	17.2	透弘文 系	細縄文 系	口縁は無紋帯を有し、棒状工具による刺突列によって区画され、以下は細縄文が充填される。	白色粘	内：10104/1 褐色 外：10102/1 褐色	良好		透弘文系 刺突文
23	縄文土器	深鉢	口縁部片	43.1	加曾利 EⅢ～ IV	R1・EⅣ 別状に 縄文さ れる	口縁は無紋帯を有し、沈線によって区画され、以下縄文が別状に充填される。	白色粘 赤色粘	内外：10104/2 灰黄褐色	良好		
24	縄文土器	深鉢	口縁部片	50.8	加曾利 EⅣ	R1・EⅣ	口縁は無紋帯を有し、沈線によって区画され、以下縄文が充填される。胴部は沈線によって円形模様を描かれ、区画内は縄文がすり磨り消される。	砂粒 白色粘	内外：10107/5 に近い黄褐色	良好		
25	縄文土器	深鉢	口縁部片	38.7	透弘文 系	R1・EⅣ	口縁は刺突列が取り、胴部は縄文が充填される。	白色粘 砂粒	内：S106/4 に近い褐色 外：S105/3 に近い赤褐色	良好		
26	縄文土器	深鉢	口縁部片	14.4	加曾利 EⅢ	無紋	器内は薄く内湾する。	小レキ 白色粘	内外：S104/6 赤褐色	良好		無文くさ み
27	縄文土器	深鉢	胴部片	23.6	加曾利 EⅢ～ IV	R1・EⅣ	沈線によって円形に区画され、区画外は縄文が磨り消される。	白色粘 透明粘 赤色粘	内：T.5105/3 に近い褐色 外：T.5104/2 灰褐色	良好		円字区画対 向
28	縄文土器	深鉢	胴部	34.1	加曾利 EⅢ	R1・EⅣ	器形は直線状に開く。微隆起線によって区画され、以下縄文が充填される。	白色粘 赤色粘	内外：10107/3 に近い黄褐色	良好		

第5表 SI01 出土遺物観察表(3)

標記番号	種類	図録	写真	重量	型式	施文	成型前の特徴	胎土	色調	焼成	材質	備考
29	織文土器	深鉢	銅部片	77.8	加曾利EⅣ	Ⅷ.縦	胴縁は外反して開き、上下二段沈線による円形に区画され、区画外は織文が磨り消される	白色粒 砂粒多い	内外：T.5185/3にぶい褐色	やや軟質		1字区画対向
30	織文土器	深鉢	銅部片	86.2	加曾利EⅣ	Ⅷ.縦	二重隆線によって区画される	白色粒 透明粒	内：10184/1褐色 外：T.5186/3にぶい褐色	良好		横隆線
31	織文土器	深鉢	銅部片	92.8	加曾利EⅣ	Ⅷ.縦	上下二段沈線による円形に区画され、区画外は織文が磨り消される	白色粒 砂粒多い	内外：T.5185/4にぶい褐色	良好		1字区画対向
32	織文土器	深鉢	銅部片	89.8	加曾利EⅣ	Ⅷ.縦	沈線によって円形に区画され、区画外は織文が磨り消される	白色粒 透明粒	内：10185/3にぶい赤褐色 外：10185/2灰黄褐色	良好		1字区画対向
33	織文土器	深鉢	銅部片	24.4	加曾利EⅣ	Ⅷ.縦	沈線によって円形に区画され、区画外は織文が磨り消される	白色粒 赤色粒 砂粒	内：10186/4にぶい褐色 外：T.5186/4にぶい褐色	良好		1字区画対向
34	織文土器	深鉢	銅部片	21.9	加曾利EⅣ	Ⅷ.縦	沈線によって円形に区画され、区画外は織文が磨り消される	白色粒 黒色粒 透明粒	内：10186/2灰黄褐色 外：5186/4にぶい褐色	良好		1字区画対向
35	織文土器	深鉢	銅部片	61.1	加曾利EⅣ	Ⅷ.縦	沈線は垂下し区画され、織文が磨り消される	白色粒 赤色粒 砂粒	内：10187/2にぶい黄褐色 外：2.5186/6褐色	良好		沈線区画
36	織文土器	深鉢	銅部片	52.7	加曾利EⅣ～Ⅴ	Ⅷ.斜め	二重隆線によって円形隆縁が描かれ、区画内は織文が充填される	白色粒 砂粒 砂粒	内外：5185/4にぶい赤褐色	やや軟質		
37	織文土器	深鉢	銅部片	30.1		Ⅷ.縦	二重隆線によって円形隆縁が描かれ、区画内は織文が充填される	白色粒 黒色粒 透明粒	内：10185/3にぶい赤褐色 外：10185/2灰黄褐色	良好		
38	織文土器	深鉢	銅部片	34.9	加曾利EⅣ	Ⅷ.斜め	沈線によって円形に区画され、織文が磨り消される	白色粒 黒色粒 透明粒	内：2.5184/4にぶい赤褐色 外：10185/3にぶい赤褐色	良好		
39	織文土器	深鉢	銅部片	38.9	加曾利EⅣ	Ⅷ.縦	沈線によって円形に区画され、織文が磨り消される	白色粒 赤色粒 黒色粒 黒色粒多い	内外：5184/2灰褐色	良好		
40	織文土器	深鉢	銅部片	79.9	加曾利EⅣ～Ⅴ	Ⅷ.縦	二重隆線によって円形隆縁が描かれ、区画外は織文が充填される	白色粒 砂粒 砂粒多い	内：10184/1褐色 外：T.5186/3にぶい褐色	良好		
41	織文土器	深鉢	銅部片	39	加曾利EⅣ	Ⅷ.斜め	二重隆線によって円形隆縁が描かれ、区画外は織文が充填される	白色粒 赤色粒 透明粒	内：10186/3にぶい褐色 外：10185/1黒褐色	良好		
42	織文土器	深鉢	銅部片	39.6	加曾利EⅣ～Ⅴ	Ⅷ.縦	地紋に織文が充填され、懸垂紋が描かれる	白色粒 赤色粒 黒色粒	内：2.5185/4にぶい赤褐色 外：T.5186/4にぶい褐色	良好		
43	織文土器	深鉢	銅部片	127	加曾利EⅣ～Ⅴ	Ⅷ.縦	地紋に織文が充填され、懸垂紋が描かれる	白色粒 黒色粒	内：T.5184/2灰褐色 外：10185/4にぶい赤褐色	良好		
44	織文土器	深鉢	銅部片	26.9	加曾利EⅣ～Ⅴ	Ⅷ.縦	地紋に織文が充填され、懸垂紋が描かれる	白色粒 砂粒 黒色粒	内：10184/1褐色 外：10185/4にぶい赤褐色	良好		
45	織文土器	深鉢	銅部片	72.8	加曾利EⅣ～Ⅴ	Ⅷ.縦	地紋に織文が充填され、懸垂紋が描かれる	白色粒 赤色粒 雲母	内：10185/2灰黄褐色 外：T.5186/3にぶい褐色	良好		
46	織文土器	深鉢	銅部片	53.6		Ⅷ.斜め	沈線によって区画され、区画外は織文が磨り消される	白色粒 黒色粒 砂粒	内外：T.5184/2灰褐色	良好		
47	織文土器	深鉢	銅部片	47.9	加曾利EⅣ	Ⅷ.斜め	沈線によって区画され、区画外は織文が磨り消される	白色粒 黒色粒 砂粒	内外：5185/4にぶい赤褐色	良好		
48	織文土器	深鉢	銅部片	36.8		Ⅷ.縦	織文が充填されたのちに、三条一単位の状態紋が描かれる	白色粒 黒色粒 砂粒や今多い	内外：T.5185/3にぶい褐色	良好		
49	織文土器	深鉢	銅部片	28.9	加曾利EⅣ～Ⅴ	Ⅷ. + Ⅷ 附加条第1種	沈線によって区画され、区画外は織文が磨り消される	白色粒 小礫	内外：10186/2灰黄褐色	良好		
50	織文土器	深鉢	銅部片	16		Ⅷ.縦	隆縁が沈下する	白色粒 砂粒	内：10186/3にぶい黄褐色 外：T.5184/1褐色	良好		

第6表 SI01 出土遺物観察表(4)

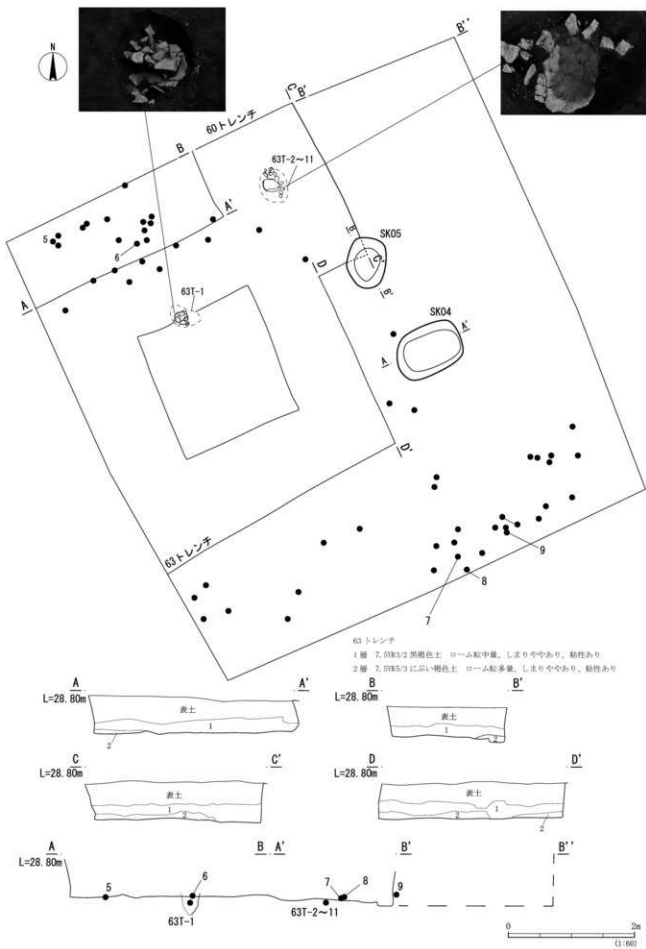
標記番号	種類	器種	形状	重量	型式	施文	成型前の特徴	胎土	色調	焼成	材質	備考
51	縄文土器	深鉢	胴部	21.9	加曾利EⅢ	LR線	縄文が充填される	白色粒	内: 10Y36/2 灰黄褐色 外: 10Y37/4 に近い黄褐色	良好		丸・0 図5 ホ
52	縄文土器	深鉢	胴部	58.6	加曾利EⅢ	無紋	器面は縄文が充填される	砂粒 白色粒 赤色粒	内外: 5YR3/6 黄褐色	良好		
53	縄文土器	深鉢	胴部	51.6	加曾利EⅢ～IV	LR線	沈線は垂下し、区画内は縄文が磨り消される	白色粒	内外: 10YR6/6 明黄褐色	良好		
54	縄文土器	深鉢	胴部	77.9	加曾利EⅢ～IV	LR線	沈線は垂下し、区画内は縄文が磨り消される	白色粒	内: 10YR4/2 灰黄褐色 外: 10YR6/6 明黄褐色	良好		
55	縄文土器	深鉢	胴部	23.4	加曾利EⅢ～IV	-	縁がさが縦位に磨かれる	白色粒 赤色粒	内: 5YR3/2 暗赤褐色 外: 5YR4/8 赤褐色	良好		
56	縄文土器	深鉢	胴部	37.3	加曾利EⅣ	LR線	沈線によって区画される	小レイ 白色粒	内: 10YR3/3 暗褐色 外: 10YR2/1 黒色	良好		
57	縄文土器	深鉢	胴部	32.1	加曾利EⅣ	LR線	沈線によって区画される	白色粒	内: 10YR3/1 黒褐色 外: 10YR4/3 に近い黄褐色	良好		
58	縄文土器	深鉢	底部	147.4	加曾利EⅢ～IV	無紋	底部は突出する	砂粒	内: 10YR3/3 暗褐色 外: 10YR5/6 黄褐色	良好		
59	縄文土器	深鉢	底部	38.1	加曾利EⅢ～IV	-	底部は小さく平底	砂粒 赤色粒	内: 2.5YR3/1 暗褐色 外: 2.5YR6/4 に近い黄色	良好		
60	縄文土器	深鉢	口縁部	37.5	加曾利EⅡ	-	口縁は内湾きみに開き、口唇部は内面にわずかに突出する。外面に沈線が一条横走し、上部は矢羽根状にヘラナデが施される	白色粒 赤色粒	内外: 10YR4/4 褐色	良好		矢羽根状沈線
61	縄文土器	深鉢	胴部	35.0	加曾利EⅡ	-	文様不明確。縄文後期中後半	赤色粒	内外: 5YR4/8 赤褐色	良好		特徴的な土器
62	縄文土器	深鉢	胴部	38.4	実用(後期)	-	斜方向に沈線が施される	白色粒 透明粒	内外: 10YR6/6 明黄褐色	良好		沈線
63	縄文土器	深鉢	底部	34.3	加曾利EⅢ	無紋	胴部片を二次利用し、外面を円形にうちかいている	砂粒	内: 10YR6/4 に近い黄褐色 外: 10YR3/1 黒褐色	破損		土製円盤
64	石器	削片	先形	7.0	基部調整	-	縦長の削片。基部を調整する	-	-	-	良好	che 縦長削片
65	石器	石皿	破片	92.10	-	-	細かに粉砕された破片。上面に一部を残す	-	-	-	-	tuf 66と同一流体か
66	石器	石皿	破片	42.50	-	-	細かに粉砕された破片。上面に一部を残す	-	-	-	-	tuf 65と同一流体か
67	石器	磨石	先形	150.80	-	-	横円形を呈するものか。大きく破損し、胴縁に一部残り面が見える	-	-	-	-	tuf
68	石器	削片	先形	8.00	-	-	縦長削片。表面に表皮を残り、縦方向に打ち欠いている。基部は細かな刻線で調整される。未製品か	-	-	-	-	che
69	石器	石核	先形	12.50	-	-	残核。葉子状を呈し、多方向に剥離が施される	-	-	-	-	sb

* 石器略号 che:チャート tuf:焼成石 sb:黒曜石

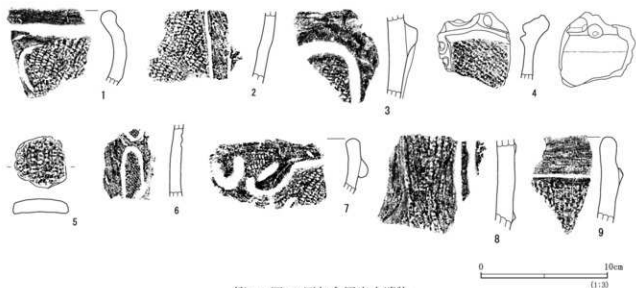
第3節 2区

第1項 包含層(第10図 図版5)

本区からは確認調査時点で遺物の集中が確認されていた。このため調査区域を拡張し掘り下げを行った。第10図に示したとおり主要遺物に番号を付し72点を取り上げた。その他にも一括遺物とした56点の遺物がある。出土総数は、石器を含め124点(総重量は3,089.7g)ある。また、型式別にみれば、ほぼ加曾利EⅢ～IV式に集約される。同調査区域内からは2基の土坑SK04・05が検出されており、この覆土からも遺物が少量出土している。



第10図 2区遺物包含層



第 11 図 2 区包含層出土遺物

第 7 表 2 区遺物包含層出土遺物観察表

押出 番号	遺物 番号	種類	器種	残存	重量	布式	地文	成形の特徴	胎土	色調	境成	材質	備考
1	2区	縄文 土器	深鉢	口縁部	83.2	加登利 I 群	LR	口縁部下に太い沈線が走り、沈線に よって横肉区画され、LR 縄文が横 切筋施文される。	白色粘土少量	内外：10YR5/6 黄褐色	良好		
2	2区	縄文 土器	深鉢	胴部	58.6	加登利 I 群	LR, 縦	胴部は懸垂紋により磨り消される	白色粘土少量	内外：10YR5/4 に近い黄褐色	良好		
3	2区	縄文 土器	深鉢	胴部	80.9	加登利 I 群	LR	太い隆帯が走り付けられ逆U字状の 区画される。区画内に沈線が深い。 内部にはLR 縄文が縦切筋に施文磨り 消される。	白色粘土 赤色粘土少量	外：10YR6/3 に近い黄褐色 断面：10YR5/1 褐色 内面：5YR4/9 赤褐色	良好		
4	2区	縄文 土器	深鉢	口縁部	44.3	加登利 I 式古 段階		口縁部に渦巻文と穿孔が穿たれる。 胴部には刺突を有する隆線が垂下 する。	白色粘土 黒色粘土	内外：10YR2/1 灰白色	破損		
5	包含層	土製 土器	内瓶	胴部	18.5	加登利 I 群	LR	全体に磨られて円形に整形される。 断面にはLR 縄文が施される。	小礫少量	内外：10YR7/4 に近い黄褐色 断面：10YR6/1 褐色	良好		
6	包含層	縄文 土器	深鉢	胴部	26.8	加登利 I 群～ IV	無筋 L	胴部に磨り消しの懸垂紋が施される。 懸垂紋は太い沈線によってU字 に区画され、区画内は無筋Lの縄文 が充填される。無文部はナゲ消される。	白色粘土少量	内外：5YR5/6 明赤褐色 断面：5YR4/1 褐色	良好		
7	包含層	縄文 土器	深鉢	口縁部	88.8	大木 10	LR, 縦	口縁部は太い張り付け隆線により 渦巻状の区画が描かれ、隆線に沿って 沈線が描かれる。	砂粒 白色粘土	内外：10YR6/8 明黄褐色 断面：10YR3/1 黒褐色	良好		
8	包含層	縄文 土器	深鉢	胴部	112.2	加登利 I 群～ I 群初 め IV	無筋 B	懸垂線により文様区画が施される。 区画外は磨り消される。	小礫 長石 石英や多	内外：10YR7/4 に近い黄褐色 断面：10YR5/1 褐色	良好		
9	包含層	縄文 土器	深鉢	口縁部	52.7	加登利 I 群	無筋	口辺に無紋帯が走り胴部との境に 懸垂線が走る。胴部には縦方向の懸 垂文が施される。	白色粘土少量	内外：7.5YR4/4 褐色 断面：7.5YR4/1 褐色	良好		

第2項 土坑（第12図 図版6）

1 SK04

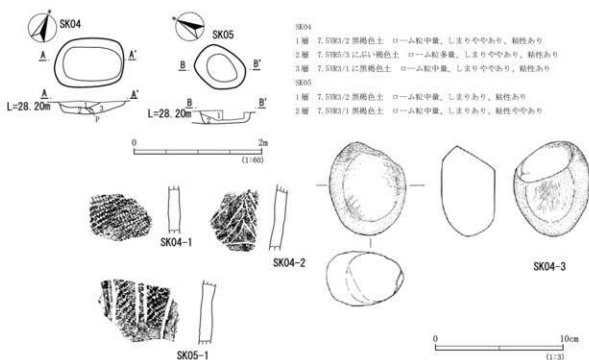
本土坑は調査区の中央やや東寄りにおいて検出された。長軸方向は北から60°ほど東に振るもので1.11m×0.77mの隅丸長方形を呈する。壁はいずれも緩やかな立ち上がりで断面形状は浅い皿状を呈している。覆土は3層に分層され、黒褐色土を基調に自然堆積を示す。深さは確認面下20cm（標高28.00m）を測る。掲載資料の縄文土器片2点、凝灰岩製磨石1点の他に、未掲載土器片4点がある（総重量377.4g）。

2 SK05

本土坑は調査区の中央北寄りにおいて検出された。長軸方向は南北方向で0.77m×短軸0.63mの不正楕円形を呈する。壁は垂直に近い立ち上がりで断面形状は鍋底状を呈している。覆土は自然堆積土で黒褐色土である（2層に分層可）。深さは確認面下21cmで（標高27.99m）を測る。出土遺物としては、掲載資料の縄文土器片1点の他に、未掲載土器片1点がある（総重量70.5g）。

3 60・63 トレンチ

60・63 トレンチは確認調査時に堅穴建物跡と想定されたが、遺構は確認されず遺物包含層として掲載することになった。本トレンチからは出土総数12点（総重量は1,013.1g）の加曽利EⅢ～Ⅳ式の土器片と大型の甕が2点（63-1・2）検出された。2点は共に掘り込まれた所で横向きに倒された状態で検出されたことから埋害であると想定される。63-1は口縁を欠損する深鉢で文様はない。器形より加曽利EⅢ～Ⅳ式と判断される。63-2は加曽利EⅢ～Ⅳ式の深鉢であり、二重隆線による懸垂文が垂下している。



第12図 SK04・SK05 同出土遺物

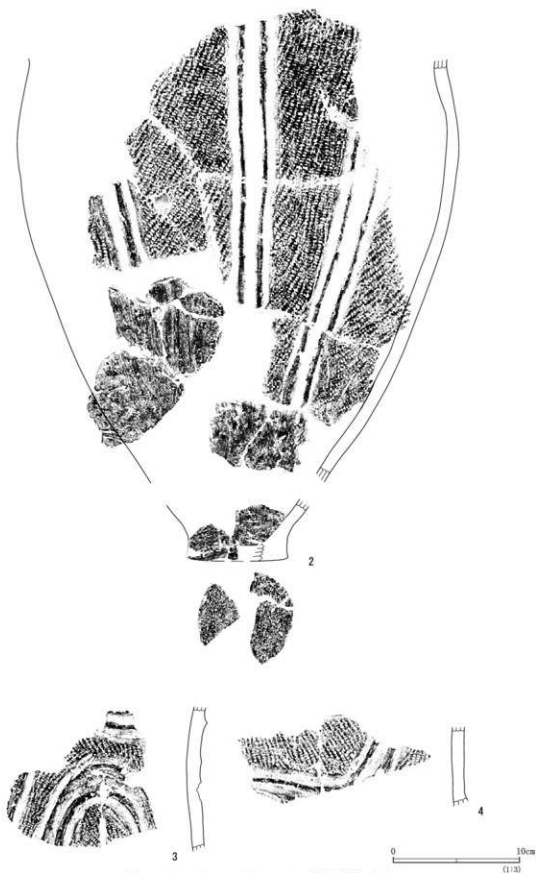
第8表 SK04・SK05 出土遺物観察表

押出 番号	遺物 番号	種類	部種	重量	型式	地文	成形法の特徴	胎土	色調	焼成	材質	備考
1	SK04	織文 土器	深鉢 胴部	25.5	加曾利王 器Ⅳ	甲筋粒	甲筋粒 織文が縦回転で施される。	白色粒	外：7.5YR5/4 に近い褐色 内：10YR4/1 褐色	良好		磨り消し 織文
2	SK04	織文 土器	深鉢 胴部	21.6	不明	-	器面は磨かれていて、細く鋭い沈線 により三角形の幾何学文様が施され る。	石英細粒	内外：7.5YR5/6 明褐色	良好		鋭い沈線 で三角形 区画
3	SK04	石器	磨石	折損	238.9	-	磨石・明石、横円形凹線を用いて全 面磨りめが見られる。端部切縁面か ら折損したため、敲打を行う。	-	-	-	たつ	
1	SK05	織文 土器	深鉢 胴部	39.6	加曾利王 器Ⅲ	甲筋粒	胴部に二本の沈線による磨り消し整 意紋が施される。	赤粘土量	外：7.5YR5/6 明褐色 断 内：10YR7/2 に近い黄褐色	良好		

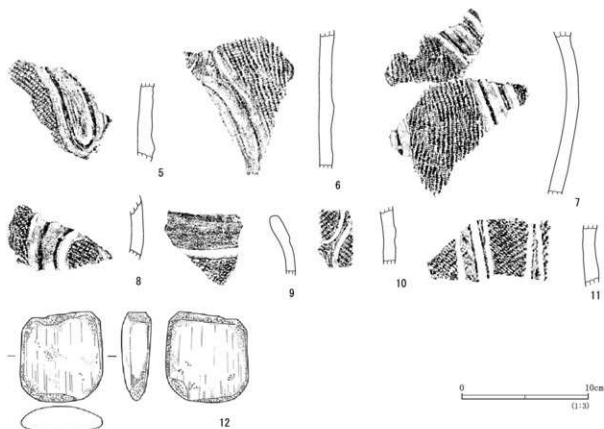
※石材番号：たつ・朝沢田



第13図 2区 63トレンチ 出土遺物(1)



第14図 2区 63トレンチ 出土遺物 (2)



第15図 2区 63トレンチ 出土遺物(3)

第9表 2区63トレンチ遺物包含層出土遺物観察表

図号	種別	形状	重量	形式	地文	成形の特徴	粘土	色調	焼成	材質	備考
1	縄文土器	胴部～底部	1833.5	加曽利EⅢ	無筋L	底部は小さく突出する。器形はキャリパー型を呈する	白色粒子 赤色粒子	内外：7.5YR4/3褐色	良好		
2	縄文土器	胴部～底部	1193.6	加曽利EⅢ	ⅡL縦	二条一単位の横線が垂下する	白色粒子多い 黒色粒子	内：8.5YR5/4にぶい褐色 外：10YR7/4にぶい黄褐色	良好		
3	縄文土器	胴部	159.0	加曽利EⅣ	ⅡL	二条一単位の横線が弧状に貼り付けられる	白色粒子多い 黒色粒子 砂礫	内：10YR2/1黒 外：10YR6/3にぶい黄褐色	良好		
4	縄文土器	胴部	111.0	—	ⅡL縦	横線によって区画される	白色粒子多い 黒色粒子 砂礫	内：7.5YR5/4にぶい褐色 外：10YR6/4にぶい黄褐色	良好		
5	縄文土器	胴部	62.9	加曽利EⅣa	ⅡL縦	二条一単位の横線が貼り付けられ、横線ないしは縄文が磨り消される	白色粒子多い 黒色粒子 砂礫	内：10YR6/4にぶい黄褐色 外：7.5YR5/1褐色	良好		
6	縄文土器	胴部	109.4	加曽利EⅣa	ⅡL斜め	二条一単位の横線が貼り付けられ、横線ないしは縄文が磨り消される	白色粒子多い 黒色粒子 砂礫	内：7.5YR5/4にぶい褐色 外：10YR6/3にぶい黄褐色	良好		
7	縄文土器	胴部	147.3	加曽利EⅣ	ⅡL斜め	二条一単位の横線が貼り付けられる	白色粒子多い 黒色粒子 砂礫	内：7.5YR5/4にぶい褐色 外：10YR2/1黒	良好		
8	縄文土器	胴部	43.3	加曽利EⅣ	ⅡL縦	二条一単位の横線が弧状に貼り付けられる	白色粒子多い 黒色粒子 砂礫	内外：10YR4/2灰黄褐色	良好		
9	縄文土器	胴部	40.5	加曽利EⅢ～Ⅳ	ⅡLa	口縁部は無文帯を有し、沈線が一条横走する	白色粒子多い 黒色粒子 赤色粒子	内：7.5YR4/1褐色 外：7.5YR5/3にぶい褐色	良好		
10	縄文土器	胴部	18.0	—	ⅡL/ⅡL	沈線によって弧状に区画される	白色粒子多い 透明粒子 赤色粒子	内：7.5YR5/2灰褐色 外：7.5YR4/2黒褐色	良好		
11	縄文土器	胴部	76.9	加曽利EⅢ	ⅡL縦	二条一単位の沈線が沈下する	白色粒子多い 黒色粒子 赤色粒子	内：7.5YR4/2灰褐色 外：7.5YR5/4にぶい褐色	良好		
12	石器	磨石	254.1	—	—	上下面は研磨されて平滑になる。側縁も一部定角式石斧の痕跡が見える。折損後、外面をこうだに削っている	—	—	—	green	

※石器略号 tre=緑色珪類

第4節 3区

第1項 SI02(第16図 図版7～8)

確認調査の際、遺物集中地点および炉跡が一部検出され竪穴建物跡であることが明らかとなった。長軸5.75m、短軸5.03m。北西から南東に長い楕円形を呈し、竪穴壁はほぼ垂直に立ち上がりを見せる。掘り込みは確認面下およそ60cmの深さで、覆土は7層に分層される。1層から5層は住居に自然堆積した土層、5・6層は炉跡の覆土、7層は炉の上面が赤褐色に変色したハードルーム層上面である。床面は中央部に向かって緩やかな傾斜を見せるが概ね平坦で踏み固められている。中央付近の標高は27.4mを測る。床はハードルーム層中にまで掘り込まれている。

柱穴は18基検出されている。これらの柱穴は住居の壁際に配置されるもので、2回の建て替え、もしくは柱穴の移設が確認される。各柱は対象形に配置されることで概ね亀甲形に配置されているものと考えられる。従って本住居は、まず、P1-P5を軸線とした炉2を中心とするP1-P2-P3-P4-P14-P15-P7-P8の8本の柱穴が配置されたものと想定される。その後何らかの理由で、2回目の配置太線で示したP8-P9-P10-P11-P12-P13-P14-P15-P16-P17の10本が配置されたようである。この2回目の配置の中心軸P10-P15の中央付近に炉1が設置されており、この炉は同時に使われたのではなく炉2の方が新しいと判断される。

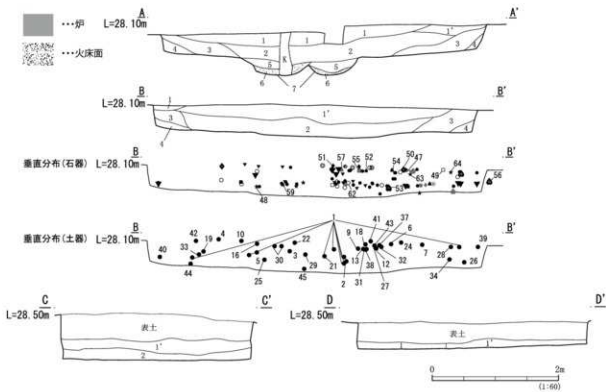
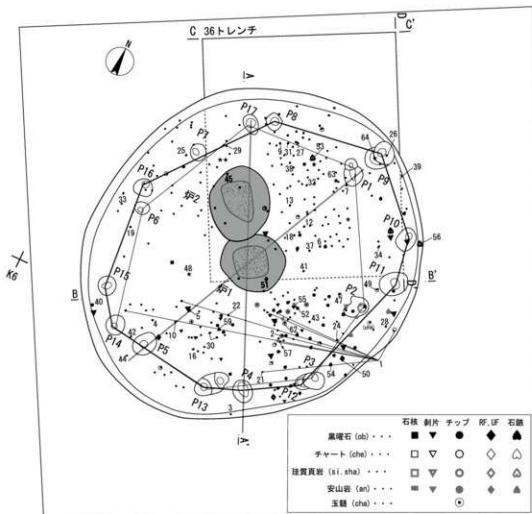
出土土器は、加曾利EⅢ～EⅣ式の破片多数が認められる。なお、SI02出土土器については、出土した土器は総点数103点、重量1,058.7gを測る。その内容は第31図に示したとおり、器種では石核・チップ・剥片(RF・UF)・チップ・石織(製品・未製品・折損品)の剥片土器、磨石・磨製石斧・敲石・軽石がある。石織製作に関わる石器群は覆土の上下2層に分かれ、レンズ状の分布を示していることから、竪穴建物廃絶後の埋没過程で窪地を利用して石織の作成が行われていた可能性があるのではないかと予想できるが、混入品の可能性も否定できない。

第10表 SI02内ビット一覧表

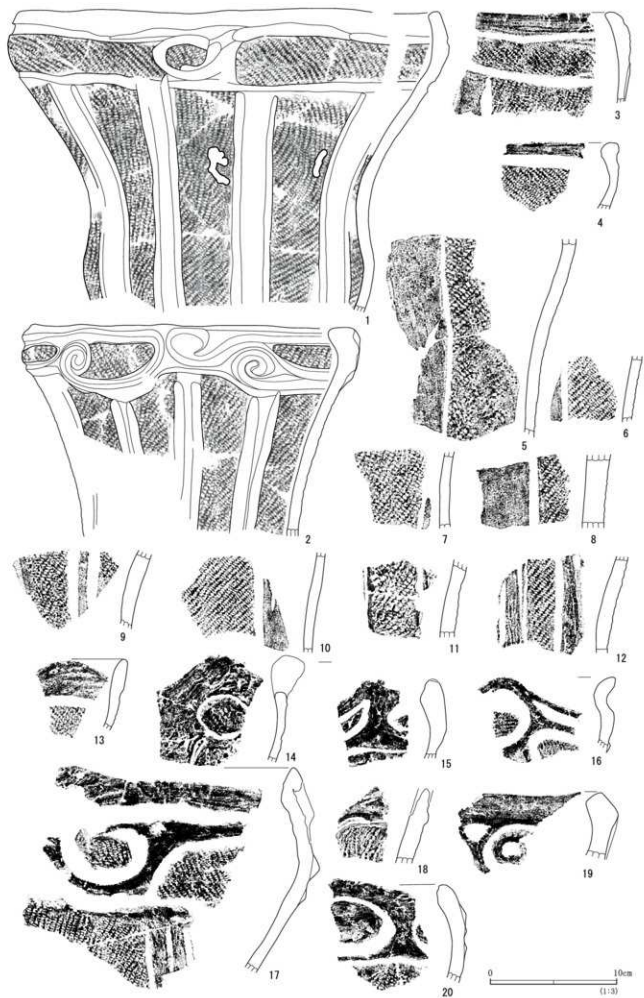
ビット番号	平面形状	長軸	短軸	深さ	備考
P1	不整形円形	44.0	31.0	31.23	2段
P2	不整形円形	42.0	35.0	46.80	
P3	楕円	35.0	29.0	43.29	
P4	楕円	37.0	31.0	18.37	
P5	楕円	42.0	33.0	28.00	
P6	円	24.0	20.0	11.90	
P7	円	27.0	27.0	25.60	
P8	円	31.0	30.0	31.40	
P9	不整形円形	51.0	46.0	49.70	2段
P10	楕円	38.0	30.0	49.10	
P11	楕円	44.0	36.0	33.70	
P12	—	13.0	23.0	7.90	2段
P13	長楕円	58.0	33.0	32.20	2段
P14	円	33.0	31.0	28.80	
P15	円	32.0	29.0	16.50	
P16	円	31.0	28.0	36.20	

SI02

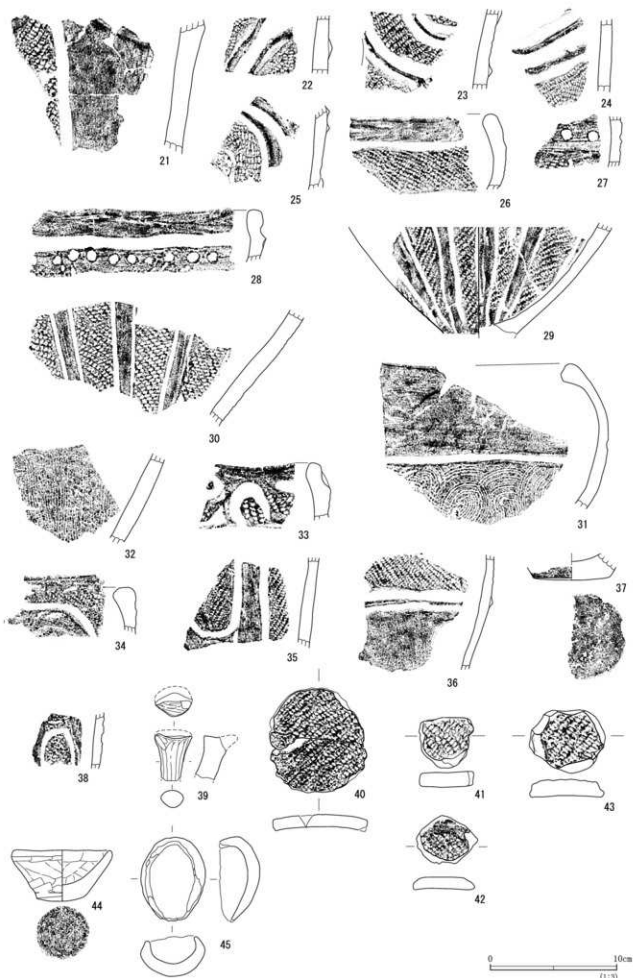
- 1層 10YR3/2黒褐色土 ローム粒多量、しまりあり、粘性あり
 1'層 10YR4/3にぶい黄褐色土 ローム粒多量、焼土粒中量、しまりあり、粘性あり
 2層 10YR5/3にぶい黄褐色土 ローム粒多量、焼土粒中量、しまりあり、粘性あり
 3層 10YR4/4にぶい褐色土 ローム粒多量、焼土粒中量、しまりあり、粘性あり
 4層 10YR4/2灰黄褐色土 ローム粒中量、しまりややあり、粘性ややあり
 5層 10YR3/1原褐色土 ローム粒中量、焼土粒中量、しまりあり、粘性ややあり Bの覆土
 6層 10YR4/2灰黄褐色土 ローム粒中量、焼土粒中量、しまりややあり、粘性ややあり Bの覆土
 7層 10YR5/3にぶい黄褐色土 ローム粒中量、しまりあり、粘性ややありローム赤色成分



第 16 図 S102



第 17 图 SI02 出土遗物 (1)



第 18 图 SIO₂ 出土遗物 (2)



第19図 SIO2出土遺物(3)

第11表 SI02 出土遺物観察表(1)

標本番号	種類	部種	残存	重量	型式	施文	成形の特徴	胎土	色調	焼成	材質	備考
1	縄文土器	深鉢	胴部	3068.60	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	口辺部は縦回転の紅土施文が3段にわたり施文される。胴部から胴部上半部の縄文はやや斜めの回転施文。胴下半は縦回転施文で、先端方法の磨り消し縄文。磨り消しの幅は広くなる	白色粘土 砂粒 赤色粘土	外：5YR4/8 赤褐色 内：5YR5/8 明赤褐色	良好		
2	縄文土器	深鉢	胴部	1683.70	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	口縁は横方向、胴部は縦回転施文され、胴部の施文の幅は狭い	白色粘土 赤色粘土 黒色粘土	内外：7.5YR4/4 褐色	良好		が体土器
3	縄文土器	深鉢	口縁部	141.50	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	口縁は横方向、胴部は縦回転施文され、胴部の施文の幅は狭い	白色粘土 赤色粘土	外側：7.5YR4/6 褐色 断面：5YR7/2 明褐色	良好		
4	縄文土器	深鉢	口縁部	45.20	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	口縁は横方向、胴部は縦回転施文され、胴部の施文の幅は狭い	白色粘土	外：7.5YR5/3 に近い黄褐色 内側：10YR3/3 黒褐色	良好		
5	縄文土器	深鉢	胴部	206.10	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	胴部施文の間は縄文が磨り消される	砂粒	外：10YR5/4 に近い黄褐色 内：10YR7/2 に近い黄褐色	良好		
6	縄文土器	深鉢	胴部	29.40	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	胴部施文の間は縄文が磨り消される	白色粘土	外：10YR2/1 黒色 断面：10YR4/1 褐色	良好		
7	縄文土器	深鉢	胴部	41.90	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	胴部施文の間は縄文が磨り消される	砂粒 白色粘土 小礫	内外：10YR5/1 褐色	良好		
8	縄文土器	深鉢	胴部	106.60	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	胴部施文の間は縄文が磨り消される	白色粘土 砂粒	外側：10YR6/8 明黄褐色 内面：10YR4/1 褐色	良好		
9	縄文土器	深鉢	胴部	74.50	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	胴部に二重単位の施文が描かれる	白色粘土	外：10YR5/3 に近い黄褐色 内：10YR3/3 黒褐色	良好		磨り消し 施文
10	縄文土器	深鉢	胴部	57.80	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	胴部施文の間は縄文が磨り消される	白色粘土	外：10YR2/1 黒色 内：10YR4/2 灰褐色	良好		
11	縄文土器	深鉢	胴部	51.90	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	胴部に施文紋が描かれる	白色粘土	外：7.5YR3/1 黒褐色 内：5YR3/3 暗赤褐色	やや 硬質		
12	縄文土器	深鉢	胴部	79.40	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	胴部に施文紋が描かれ、区画内は縄文が磨り消される	砂粒 赤色粘土 白色粘土	外：7.5YR5/4 に近い黄褐色 内：2.5Y3/1 黒褐色	良好		
13	縄文土器	深鉢	口縁部	28.00	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	口縁以下に太い沈線が描き、内部に横方向の紅土施文が施される	白色粘土	外：5YR5/8 明赤褐色 内：5YR3/1 黒褐色	良好		大波紋口 縁
14	縄文土器	深鉢	口縁部	96.30	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	太い粘土帯を張り付けた突起となり、幅広い無文帯を有する。波状凹底下に円形の文様を沈線で描き、区画内には磨り消された紅土施文が僅かに残る	白色粘土	外：10YR3/1 黒褐色 内側：5YR4/8 赤褐色	良好		
15	縄文土器	深鉢	口縁部	42.20	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	幅広い無文帯を有し、底下に沈線で横線の区画が左右から描かれ対峙する。区画内は無文	白色粘土	内外：10YR6/4 に近い黄褐色 内面：10YR3/1 褐色	良好		
16	縄文土器	深鉢	口縁部	57.20	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	縦線部から二重隆線により円形に区画され、胴部にかけて連続する。区画内には紅土施文が施される	白色粘土	外：5YR4/8 明赤褐色 内：5YR5/6 明赤褐色	良好		
17	縄文土器	深鉢	胴部 口縁部	422.00	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	口辺は太い隆線により溝帯が描かれ、区画内に縦回転施文を施されたもの磨り消される。胴部はやや幅広い狭い磨り消し施文が垂下し区画内には紅土施文が縦回転で施される	小礫	内外：5YR5/8 明赤褐色 断面：10YR6/4 に近い褐色	良好		
18	縄文土器	深鉢	胴部	46.40	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	やや太い隆線が斜行し、溝を穿く。胴部上半に縦回転施文が施され、磨り消される	白色粘土	外側：10YR4/3 に近い黄褐色 内面：10YR3/1 黒褐色	良好		二重隆線 区画
19	縄文土器	深鉢	口縁部	106.10	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	高次の口縁でやや無文帯を設け、口辺は二重隆線により円形の区画を設け、区画内の縄文は磨り消される	白色粘土	内外：7.5YR6/8 褐色 断面：7.5YR3/1 黒色	良好		
20	縄文土器	深鉢	口縁部	94.40	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	太い沈線によって円形に区画される	赤色粘土 白色粘土	内外：10YR6/4 に近い黄褐色 断面：10YR6/2 灰褐色	良好		
21	縄文土器	深鉢	胴部	597.40	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	太い沈線により上端がやや逆U字形に描かれ、紅土施文が縦回転で施される。胴部付近には二重隆線による溝帯一部が見え、磨り消し帯の幅は広い	白色粘土 砂粒	内外：5YR5/6 明赤褐色	良好		
22	縄文土器	深鉢	胴部	58.90	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	縦隆線によって区画される	砂粒 白色粘土 赤色粘土	外：7.5YR6/3 に近い褐色 内：2.5YR4/8 赤褐色	良好		
23	縄文土器	深鉢	胴部	74.90	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	隆線によって区画される	白色粘土	内外：7.5YR5/8 明赤褐色 断面：7.5YR3/1 褐色	良好		
24	縄文土器	深鉢	胴部	49.90	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	二重単位の隆線が張り付けられる	白色粘土	外：10YR6/4 に近い黄褐色 内：10YR5/2 灰褐色	良好		二重隆線 溝帯
25	縄文土器	深鉢	胴部	50.50	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	二重単位の隆線により円形に区画され、縄文が充填される	白色粘土	内外：7.5YR6/8 褐色	良好		
26	縄文土器	深鉢	口縁部	107.50	加曾利EⅠ Ⅱ	紅土	内側する口縁部以下に幅広い無文帯が広がり、以下に二重の沈線が胴部のあいだに描る	白色粘土 赤色粘土	内外：7.5YR6/6 褐色	良好		

第12表 SI02 出土遺物観察表(2)

図録番号	種類	器種	残存	重量	型式	施文	成形の特徴	胎土	色調	構成	材質	備考
27	縄文土器	深鉢	胴部	24.90	加曾利瓦 Ⅰ様		上部に棒状工具による刺突列が見ふ	白色粒 黑色粒 透明粒	外：10YR6/4 に近い黄褐色 内面：7.5YR5/8 明褐色	良好		遠弘文系 円形刺突
28	縄文土器	深鉢	口縁部	125.00	加曾利瓦 Ⅰ様		口縁直下に太い沈線が横走し、刺突列が一部りする	白色粒	外：5YR4/8 赤褐色 内：10YR7/1 灰白色	良好		遠弘文系 か
29	縄文土器	鉢	胴部	254.20	加曾利瓦 Ⅰ様		一条一単位の状態文が等間隔に施文される	白色粒	外：7.5YR5/8 明褐色 内：10YR2/2 灰白色	良好		
30	縄文土器	深鉢	胴部	196.40	加曾利瓦 Ⅰ様		一条一単位の状態文が等間隔に施文される	白色粒	外：7.5YR6/6 褐色 内面：7.5YR4/2 灰褐色	良好		
31	縄文土器	鉢	胴部	179.00	加曾利瓦 Ⅰ様		細書きが連張状に施される	白色粒	内外：7.5YR5/6 明褐色 底：7.5YR4/1 灰褐色	良好		
32	縄文土器	鉢	胴部	96.10	加曾利瓦 Ⅰ様		全面に細書きが縦位に施文される	白色粒子 赤色粒子 透明粒 雲母	内：10YR5/4 に近い黄褐色 外：7.5YR5/6 明褐色	良好		象線文
33	縄文土器	深鉢	口縁部	63.60	加曾利瓦 Ⅰ様		口縁部は太い沈線により区画される	細砂粒	内外：7.5YR5/8 明褐色	良好		
34	縄文土器	深鉢	口縁部	57.60	加曾利瓦 Ⅰ様		口唇部は横走し、直下に施文が横間隔に施文される	白色粒 砂粒 赤色粒	内外：5YR5/8 赤褐色 底：5YR6/3 に近い褐色	良好		
35	縄文土器	深鉢	胴部	68.00	加曾利瓦 Ⅰ様		沈線により横間隔に区画され、区画外は施文が磨り消される	白色粒	内外：7.5YR6/6 褐色 底：7.5YR5/1 褐色	良好		
36	縄文土器	深鉢	胴部	82.00	加曾利瓦 Ⅰ様		胴部で微隆線が一部りし、以下無紋となる	白色粒	内外：7.5YR5/6 明褐色 底：7.5YR7/2 明褐色	良好		
37	縄文土器	深鉢	底面	73.10	加曾利瓦 Ⅰ様		底面はやや丸底ぞら	白色粒	内外：10YR6/4 に近い黄褐色	良好		
38	縄文土器	深鉢	胴部	18.20	加曾利瓦 Ⅰ様		沈線により区画され、区画外は施文が磨り消される	白色粒 赤色粒 砂粒	外：10YR4/3 に近い黄褐色 内面：5YR5/8 赤褐色	良好		対向する 十字区画
39	縄文土器	壺	桶状 把手	12.90	加曾利瓦 Ⅰ様			白色粒	外：10YR7/4 に近い黄褐色 底：10YR5/2 灰黄褐色	良好		
40	土製品	円盤	成形	67.80	加曾利瓦 Ⅰ様		胴部片の外周を打ち欠いて円形に加工し、二次利用されている	白色粒	内外：10YR3/1 黒褐色 断面：10YR5/2 灰黄褐色	良好		
41	土製品	土器	片断	22.60	加曾利瓦 Ⅰ様		破片を打ち欠いて二次利用している	白色細粒	内外：10YR6/3 に近い黄褐色	良好		切り欠き 縦軸
42	土製品	円盤	成形	19.00	加曾利瓦 Ⅰ様		細隆線が横走る。破片を打ち欠いて二次利用されている	砂粒 赤色粒	内外：10YR6/2 灰黄褐色 底：10YR6/4 に近い黄褐色	良好		
43	土製品	円盤	成形	12.70	加曾利瓦 Ⅰ様		破片を打ち欠いて二次利用している	白色粒 赤色粒 黒色粒 透明粒	内外：10YR5/4 に近い黄褐色	良好		横間隔全 面粗い研 磨
44	土製品	ミニチュア土器	成形	113.50	加曾利瓦 Ⅰ様		底面は小さくやや突出する。器内は平く、体部は高線的に隆く。全体的に丁寧な指ナゲが施される	白色粒	内外：10YR6/4 に近い黄褐色 底：7.5YR6/4 に近い褐色	破損		
45	ミニチュア土器	片口	成形	52.10	加曾利瓦 Ⅰ様		底面は横間隔を見出し、片側は縁やがに隆く	白色粒	内外：5YR5/6 赤褐色	良好		特殊土器
46	ガラス製品否?	びん玉	成形	0.04	-	-	白玉状で中央貫通孔、気泡多い。	-	-	-	-	ガラス
46	ガラス製品否?	びん玉	成形	0.04	-	-	-	-	-	-	-	ガラス

第13表 SiO₂出土遺物観察表(3)

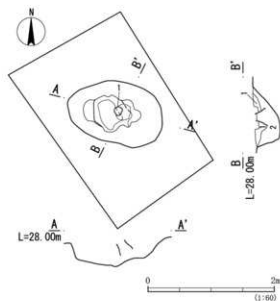
母体番号	種類	器種	残存	重量	印式	地文	成形の特徴	胎土	色調	焼成	材質	備考
47	石器	石核	包状彫削	37.20	-	-	包状核で、多方向から打ち欠きが見られる。	-	-	-	che	母器A
48	石器	磨製石斧	刃部	16.80	-	-	上下両面ともによく研削されている。	-	-	-	che	重層状彫削か
49	石器	石核	包状	35.40	-	-	包状核で、多方向から削痕が施される。	-	-	-	che	母器A
50	石器	野	完形	9.50	-	-	外側縁に細やかな削痕を加え刃部としている。	-	-	-	che	母器A
51	石器	ナイフ	野	1.70	-	-	下端面に削痕が見える。短長の断片。	-	-	-	ob	磨製野片
52	石器	断片	野	1.20	-	-	短長の断片。	-	-	-	ob	
53	石器	石核	完形	6.80	-	-	回基三角核。基部側の縁りは明瞭であるが、先端部の調整は粗雑である。	-	-	-	che	母器A
54	石器	野	未成品	1.20	-	-	平基三角核。表面の削痕は丁寧に行われているが背面は粗雑である。基部側は刃部か。	-	-	-	ob	石核未成品
55	石器	石核	欠損	0.60	-	-	長脚回基三角核の基部の断片。側面調整は細やかに	-	-	-	o11	母器B
56	石器	石核	完形	0.50	-	-	回基三角核。側縁はほぼ直線的になる。内外面とも	-	-	-	ob	母器A
57	石器	石核	完形	1.50	-	-	回基三角核。側縁はやや内湾し、左基部は欠損している。	-	-	-	ob	未成品か。
58	石器	石核	未成品	3.00	-	-	形状不明。基部側に若干の加工が見られる。	-	-	-	aga	
59	石器	石核	完形	1.20	-	-	回基三角核。窪みは浅く、側縁はやや外反する。右	-	-	-	ob	側面欠損
60	石器	石核	野欠損	0.80	-	-	回基三角核。調整は粗雑。左基部欠損	-	-	-	ob	
61	石器	軽石製石製品	破損	4.00	-	-	小形形で周縁はやや成形される。	-	-	-		
62	石器	スクレーパー	完形	18.80	-	-	側縁部に細やかな調整を加えている。	-	-	-	an	
63	石器	磨石	磨石破損	97.50	-	-	断片で、一面に表皮を残す	-	-	-	o12	一面に磨打痕
64	石器	磨石	磨石破損	49.10	-	-	横切面自然縁の一端を欠損する。	-	-	-	o12	表面に磨打痕が見られることより磨石と判断した

※石材料号 che-チャート ob-黒曜石 o11-シルト岩 an-安山岩 aga-メノウ o12-凝灰岩

第5節 4区

第1項 SK02(第20図 図版9)

本遺構は確認調査時に、遺構の性格確認のため遺構を掘り下げたものである。東西軸が長楕円形を呈しており、長軸1.54m×短軸0.96m、深さ0.47cm(標高22.3m)を測る。底部形状はやや凹凸が激しく、西側に向かい深くなる。壁は45°程の角度で立ち上がる。覆土は自然堆積で2層に分層される。



SK02

- 1層 7.5%の水明褐色 ローム粒中量、しまりあり、粘性ややあり
- 2層 7.5%の水明褐色 ローム粒少量、しまりあり、粘性ややあり

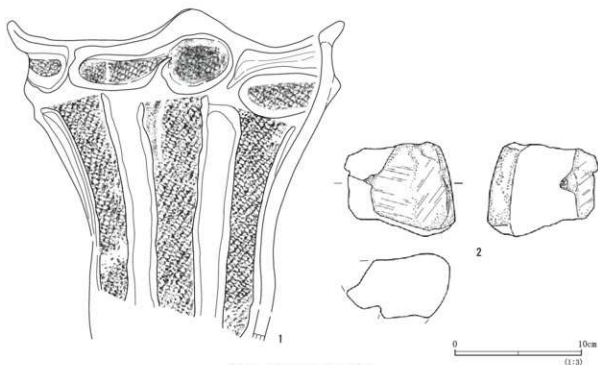
第20図 SK02



埋掘出土状況

なお、本遺構からは縄文土器1点と石器1点が出土しており、2点とも掲載遺物とした。1は深鉢である。加曾利EⅢ～IV古段階の深鉢が逆位で埋められていたことから、埋設土器と考えられる。2は凹石である。全体的に被熱による赤変が見られる。欠損しているが使用面には明瞭な磨り目があり、1か所の窪みを有する。

本遺構は埋設土器が検出されていることから竪穴建物跡であった可能性も指摘しておく。



第21図 SK02出土遺物

第14表 SK02出土遺物観察表

図号 番号	種類	図種	残存 状態	重量	型式	地文	成形形の特徴	胎土	色調	焼成	材質	備考
1	縄文 土器	深鉢 光形	ほぼ 完全	2300.00	加曾利土 Ⅲ(古)	紅 羅	口縁部は4単位の高起が張り付けられ、胴部は隆 帯によって区画化され、縄文が北傾される。胴部は 2と1単位磨り消し懸垂文が垂下する	内外: 10YR4/4	白色粒 赤色粒	良好		
2	縄	-	破損	158.10	-	-	被熱による赤変が見られる。使用面に明瞭な磨り目 があり、1か所の窪みを有する	-	-	-	1sf	

発見材料番号: 1sf- 細目

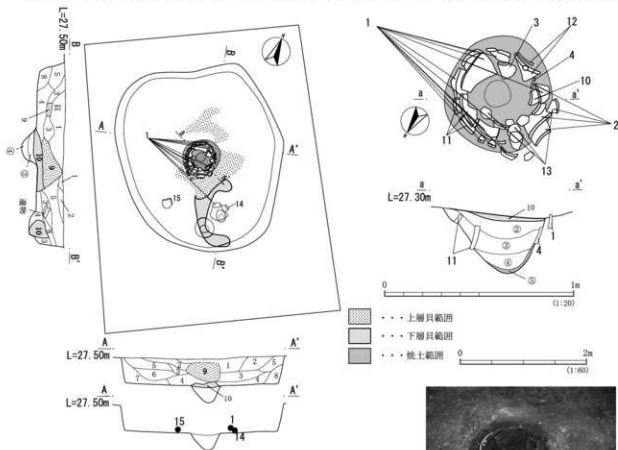
第6節 5区

第1項 SI03(第22図 図版10～11)

確認調査において遺物集中地点および炉跡が一部検出され竪穴建物跡とされる。長軸3m、短軸2.76mを測る。北西-南東軸の長楕円形を呈する。竪穴壁はほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みは確認面下およそ45cmの深さである。覆土は14層に分層される。1層～8層は竪穴建物跡内に自然堆積した土層。9・10層は貝層であり、南側から投げ込まれ中央に集中する。10層の貝層が形成された後、3・4・5・6層が自然堆積し、9層の貝が投げ込まれている。

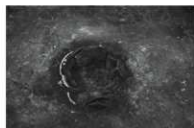
床面は中央部に向かって緩やかな傾斜を見せるが概ね平坦で良く踏み固められている。中央付近の標高は27.0mを測る。床はハードローム層中にまで掘り込まれている。

炉は5層に分層され、1層は上面の貝層である。2層は暗褐色のローム、3層は灰白色で焼土粒を



SI03

- 1層 10YR2/3 黒褐色 ローム粒多量、しまりやあり、粘性あり
- 2層 10YR2/3 黒褐色 ローム粒中量、しまりややあり、粘性ややあり
- 3層 10YR3/3 暗褐色 ローム粒多量、焼土粒微量、しまりあり、粘性ややあり
- 4層 10YR3/3 暗褐色 ローム粒中量、しまりややあり、粘性あり、小型ロームブロック中量
- 5層 10YR5/4 暗褐色 ローム粒中量、しまりややあり、粘性あり
- 6層 10YR5/3 に近い黄褐色 ローム粒多量、しまりあり、粘性ややあり
- 7層 10YR5/4 に近い黄褐色 小型ロームブロック中量、しまりややあり、粘性ややあり
- 8層 10YR5/4 に近い黄褐色 ローム粒多量、しまりあり、粘性あり
- 9層 貝層1 上層
- 10層 貝層2 下層 灰が混入しイボキガ多し
- ①層 10YR3/3 暗褐色 ローム粒中量、しまりややあり、粘性ややあり
- ②層 10YR8/2 灰白色焼土粒中量、しまりややあり、粘性ややあり
- ③層 10YR8/1 灰白色 炭化物粒中量、しまりややあり、粘性ややあり
- ④層 焼土層 底の焼けた部分

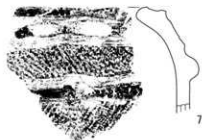
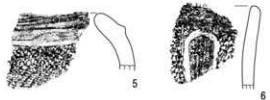
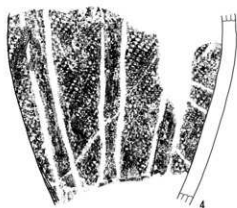
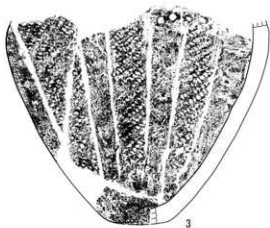
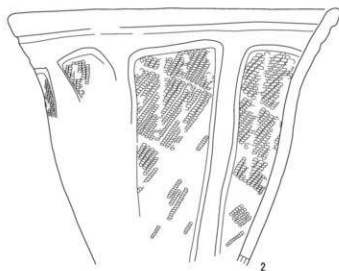
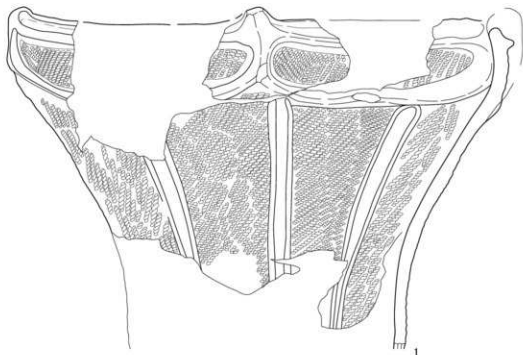


埋葬出土状況



貝出土状況

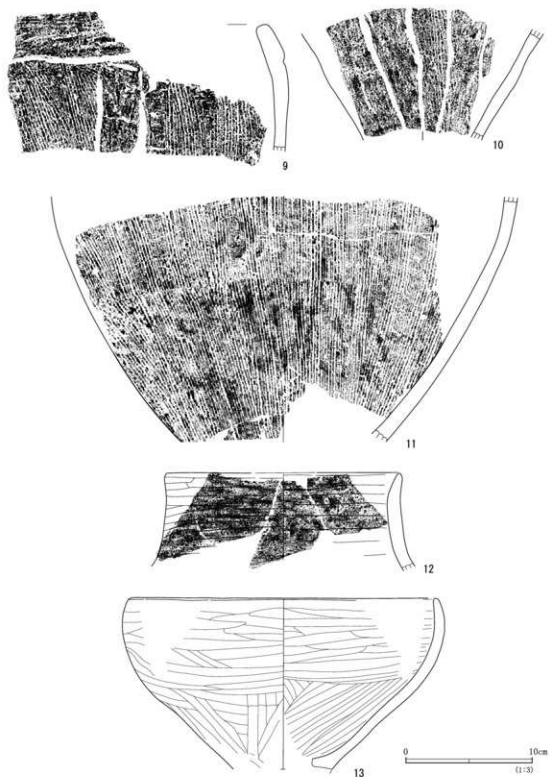
第22図 SI03



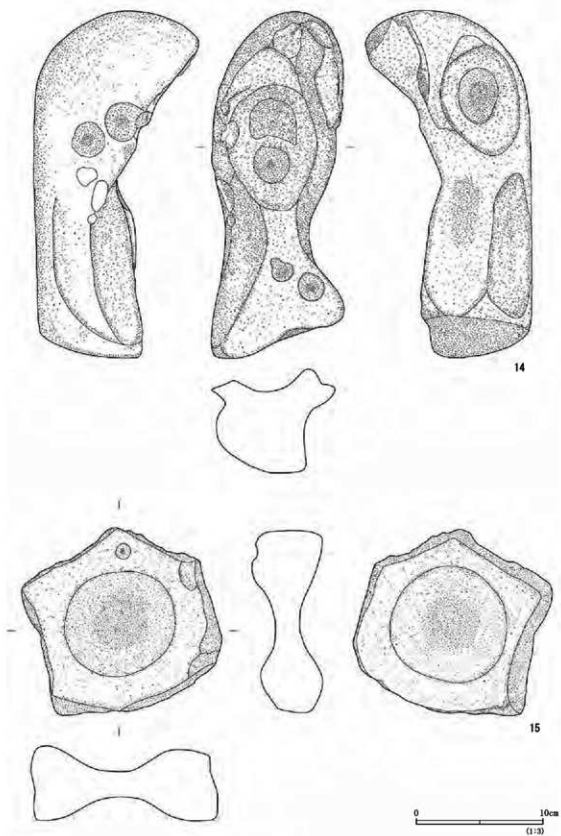
第 23 図 S103 出土遺物 (1)

含み、4層は灰白色で炭化物を含む。5層は焼土層で底の焼けた部分である。本遺構の炉は中央に位置し、複数の土器片によって作られた土器囲い炉である。

出土土器は、加曾利EⅢ式の大型破片が主体的である。また石皿が出土している（総点数129点、総重量14,411.5g）。



第24図 SI03出土遺物(2)



第 25 図 SI03 出土遺物 (3)

第15表 SI03 出土遺物観察表

標本番号	種類	器種	形状	寸法	重量	型式	施文	成形の特徴	粘土	色調	構成	材質	備考
1	縄文土器	深鉢	丸形	147.7	加曽利 EⅢ	Ⅲ Ⅲ	口縁は直状を呈し、5単位の手平が張り付けられる。口縁帯は隆帯によって楕円形に区画され、縄文が多方面から充填される。胴部は2条一単位の懸垂文が等間隔に施される	白色粘 赤色粘	内外：7.5186/4にぶい褐色	良好			
2	縄文土器	深鉢	口縁～ 中	133.2	加曽利 EⅢ	Ⅲ Ⅲ	口縁直下に沈線が1条入り。胴部は沈線によって区画され、縄文が充填される	白色粘 赤色粘	内：10YR4.2灰黄褐色 外：7.5185/3にぶい褐色	良好			
3	縄文土器	深鉢	胴部	495.7	加曽利 EⅢ	Ⅲ Ⅲ	懸垂文によって区画され、縄文が充填される	白色粘 赤色粘	外側：10YR6/4にぶい黄褐色 内：5YR5.9明赤褐色	良好			
4	縄文土器	深鉢	胴部	537.1	加曽利 EⅢ	Ⅲ Ⅲ	懸垂文によって区画され、縄文が充填される	白色粘 赤色粘	外：6Y7にぶい黄褐色 内：5YR6.6褐色	良好			
5	縄文土器	深鉢	口縁部	67.8	加曽利 EⅢ～ IV	羽状 文	口縁直下に幾何線によって区画され、以下縄文が施される	白色粘 赤色粘	内外：2.5YR5/4赤褐色	良好			
6	縄文土器	深鉢	口縁部	39.4	加曽利 EⅢ～ IV	L線	沈線によって区画され、区画内は縄文が磨り消される	白色粘 赤色粘 透明粘	内外：7.5186/3にぶい褐色	良好			断面は摩滅し転用の可能性あり
7	縄文土器	深鉢	口縁部	170.4	加曽利 EⅢ～ IV	Ⅲ	口縁帯は隆帯によって区画され、縦横同軸縄文が充填される。胴部は縦同軸縄文	白色粘 赤粘	内外：7.5186/4にぶい褐色	良好			
8	縄文土器	深鉢	口縁部	52.2	加曽利 EⅢ	Ⅲ Ⅲ 線	全面に縄文が施されたのち、口縁直下に2条の縦線が施される。縦線には指による押圧が等間隔に施され、胴部は横状沈線が縄文の上に施される	白色粘	内外：2.5YR7.6褐色	良好			条線文、 幾何線 文土器
9	縄文土器	深鉢	口縁部	299.4	加曽利 EⅢ～ IV	-	全面に磨き消されたのち、口縁下に沈線が1条入り。胴部は沈線によって区画され、区画内は磨り消される	白色粘 赤色粘	内外：7.5YR3/2黒褐色	良好			
10	縄文土器	鉢	胴部	183.4	加曽利 EⅢ	-	全面に磨き消されたのち、胴部は沈線によって区画され、区画内は磨り消される	細砂粘	内外：5YR4.6赤褐色	良好			
11	縄文土器	鉢	胴部	860.8	加曽利 EⅢ	-	全面磨き消されたのち	白色粘	外：5YR5.6明赤褐色 内：5YR4.6赤褐色	良好			条線文
12	縄文土器	盃	胴部	139.4	加曽利 EⅢ	Ⅲ	胴部は内傾し、口縁部は立つ。内外はヒコガキが施され無紋	白色粘 砂粘	内外：7.5YR5.6明褐色	良好			内傾する 口縁無文 器形
13	縄文土器	鉢	口縁～ 下平	327.3	加曽利 EⅢ	-	下平は直線的に開き、上半は内傾する。内外はヒコガキが施され、無紋	細砂粘	内外：5YR4.8赤褐色 断面：5YR6/4にぶい褐色	硬質			
14	石器	石鏃	丸形	2500.9	-	-	全面使用痕あり	-	-	-	10		
15	石器	石鏃	丸形	2200.9	-	-	全面使用痕あり	-	-	-	10		

奈良材料号：nc-砂呂 gramo-花崗閃緑岩

第7節 6区

確認調査によって黒色の楕円形プラン（SK03）が検出されたため、調査対象地となった。表土除去、遺構の平面形態を精査した結果、複数の遺構の重複と捉え直し、調査区を徐々に拡張した。それゆえ、発掘調査時点ではSI04・SK03・06の3基を各々別土坑として各遺構範囲から遺物を取り上げた。

第1項 SI04

平面形状は隅丸長方形を呈する。SK03及びSK06を本遺構が切る。長軸3.35m、短軸2.5mを計る。覆土は4層に分層され、暗褐色土の自然堆積である。床面は平坦であるが、壁に近づくにつれ浅くなり、壁の立ち上がりとなる。柱穴は検出されていない。

床面中央付近で焼土と炭化物が検出され、床面も強い被熱を受けているが、炭化物は粉上になり形のわかるものはない。床面の中央のみ被熱を受けていることから、焼失家屋とは言えず、土屋解体後に火をつけたものと思われる。遺物の出土も中央付近に集中して出土し、南壁付近には埋甕（第27図5・6）が検出され、床面を掘り込まれて上向きに据えられている。

出土遺物総点数171点、重量2,651.3gである。本遺構から出土した土器は加曾利EⅢ～EⅣ式に相当し、埋甕から本遺構の帰属時期は加曾利EⅢ式期である。

なお、SI04の西側には樹木が自生しており、西側の範囲を捉えることはできていない。

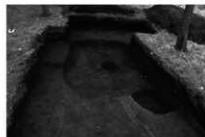
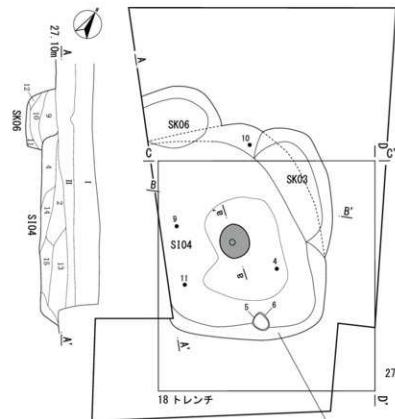
第2項 土坑

1 SK03

本土坑はSI03北東側に位置し、同遺構に切られている。長軸（2.0m）、短軸（0.95m）深さ25cmを計り、平面形状は不整楕円形を呈する。断面は皿状で、覆土は4層に分層され黒褐色土と暗褐色土の人為堆積である。出土遺物は加曾利EⅢ式土器及び磨石と石鏃が検出され、出土遺物の総点数は38点（重量520.1g）である。SK03-1とSK06-2は同原体の縄文が施されており、同一個体の可能性もあるが接合には至らなかった。

2 SK06

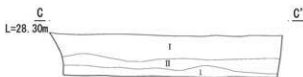
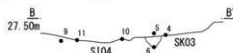
本土坑はSI03北西側に位置し、同遺構に切られている。長軸（1.15m）、短軸（1.0m）、深さ（0.47m）を計り、平面形状は不整楕円形。覆土は黒褐色土と暗褐色土の自然堆積である。出土遺物は加曾利EⅢ～EⅣ式期に相当する土器と軽石が検出された。出土遺物の総点数は23点（重量500.7g）である。



SI04・SK03・SK06

層

- 1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒中量、炭化物粒中量、焼土粒中量、しまりややあり、粘性ややあり
- 2層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒中量、炭化物粒中量、焼土粒多量、しまりややあり、粘性ややあり
- 3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒中量、炭化物粒中量、焼土粒多量、しまりややあり、粘性ややあり

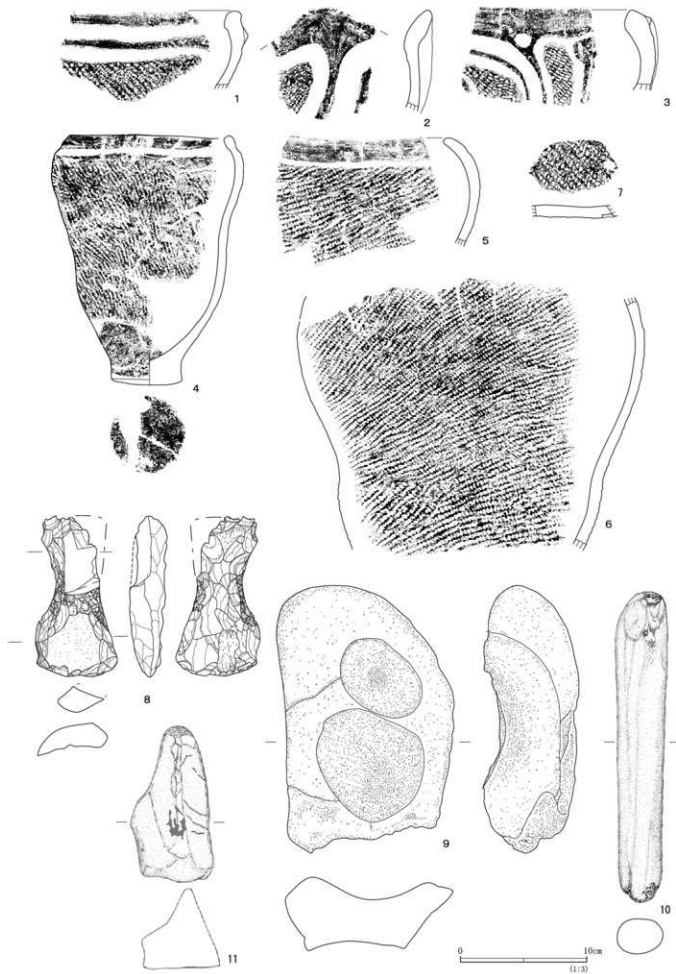


埋窰出土状況

- I 7.5YR2/1 黒色土 表土
- II 10YR4/4 黒色土
- 1層 10YR3/3 に近い黄褐色土 ローム粒多量、しまりややあり、粘性あり
- 2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒中量、しまりややあり、粘性ややあり
- 3層 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒中量、焼土粒多量、しまりあり、粘性ややあり
- 4層 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒中量、しまりあり、粘性あり
- 5層 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒中量、しまりややあり、粘性ややあり
- 6層 10YR4/2 灰黄褐色土 ローム粒多量、しまりややあり、粘性ややあり
- 7層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒中量、しまりあり、粘性あり
- 8層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒中量、焼土粒多量、しまりややあり、粘性ややあり
- 9層 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒多量、しまりあり、粘性あり

- 10層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒中量、炭化物粒中量、焼土粒中量、しまりあり、粘性ややあり
- 11層 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒中量、しまりあり、粘性あり
- 12層 10YR4/2 灰黄褐色土 ローム粒中量、しまりあり、粘性あり、小型ロームブロック混入
- 13層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒中量、炭化物粒中量、しまりあり、粘性ややあり
- 14層 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒中量、炭化物粒中量、しまりややあり、粘性ややあり
- 15層 10YR3/1 黒褐色土 ローム粒中量、炭化物粒中量、しまりあり、粘性あり
- 16層 10YR4/2 灰黄褐色土 ローム粒多量、しまりあり、粘性ややあり

第26図 SI04・SK03・SK06

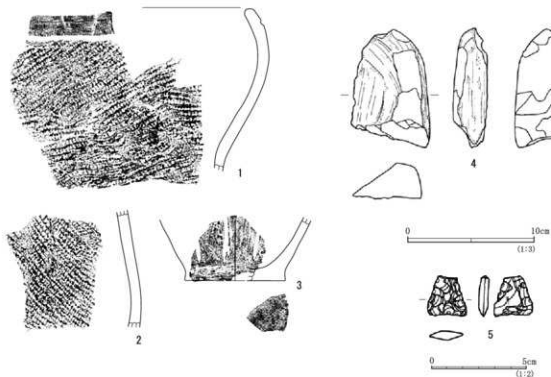


第 27 图 S104 出土遗物

第16表 SI04 出土遺物観察表

出土番号	種類	器種	残存	重量	型式	地文	成形の特徴	胎土	色調	焼成	材質	備考
1	縄文土器	深鉢	口縁部	116.7	加群利EIV	乱織	口縁に隆帯が巡る	白色転 赤色転 透明転	内外: 7.53R5.6 明褐色	良好		
2	縄文土器	深鉢	口縁部	117.4	加群利EIV	乱織	口縁は波状を呈し、半隆起沈線によって区画される	白色転 赤色転 黒色転 透明転 砂転	内外: 7.53R5.4 に近い褐色	良好		
3	縄文土器	深鉢	口縁部	171.2	加群利EIV	乱織	微隆線によって区画される	白色転 透明転	内外: 10YR6/4 に近い黄褐色	良好		
4	縄文土器	深鉢	底部 3/4	712.1	加群利EIV	無筋 縦	底部は突出し、器形はキャリバー型を呈する。口縁直下に太い沈線が一巡りし、以下縄文が施文される	白色転 赤色転 透明転 雲母	内: 10YR4.2 灰黄褐色 外: 10YR4/3 に近い黄褐色	良好		
5	縄文土器	深鉢	口縁部	134.5	加群利EIV	乱織	口縁に沈線が一帯巡り、以下縄文が施文される	白色転 赤色転	内外: 10YR6/4 に近い黄褐色	良好		
6	縄文土器	深鉢	底部欠損	2284.7	加群利EIV	乱織	器形はキャリバー型を呈し、全面に縄文が施文される	白色転 赤色転	内外: 10YR6/4 に近い黄褐色	良好		
7	土製 土器	円 盤	銅器片 利用	39.1	-	乱織	銅片を横円形に打ち欠いて二次利用	白色転 赤色転 透明転	内外: 7.53R5.4 に近い褐色	良好	長横円	
8	石器	打製 石斧	破損	109.3	分銅形	-	-	-	-	-	hor	
9	石器	石鏃	完形	2600.0	-	-	-	-	-	-	dio	磨り窪み
10	石器	石棒	完形	862.7	石筒・ 石棒	-	-	-	-	-	sls	
11	石器	押さ 石	完形	480.5	-	-	-	-	-	-	ss	張付者

帯石材料略号 hor-玄武岩 dio-閃緑岩 sls-板状岩 ss-砂岩

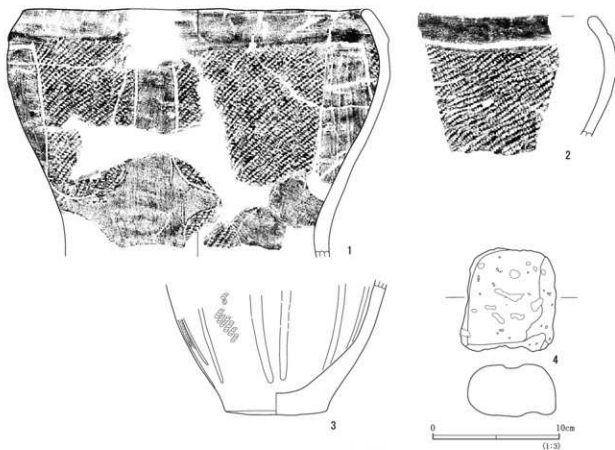


第28図 SK03 出土遺物

第17表 SK03 出土遺物観察表

押出番号	種類	器種	残存	重量	型式	地文	成型形の特徴	胎土	色調	地成	材質	備考
1	陶文土器	深鉢	口縁~中	370.9	加勢利EⅡ群 EⅡ群	EⅡ, EⅢ	口縁直下に沈線が一条走り、以下縄文が施文される	白色粘 赤色粘	内: 10YR5/4 に近い黄褐色 外: 7.5YR6/4 に近い橙色	良好		縄文 陶文Eタイプ
2	陶文土器	深鉢	口縁~中	195.6	加勢利EⅡ群 EⅡ群	EⅢ群	全面に縄文が施文される	白色粘 赤色粘	内: 10YR5/2 に近い黄褐色 外: 7.5YR6/4 に近い橙色	良好		縄文 陶文A大木タイプ
3	陶文土器	深鉢	底部	45.8	加勢利EⅡ群 EⅡ群	EⅢ群	底部は平底でやや突出する。胴部は懸垂文が等間隔に施される	白色粘 赤色粘	内: 7.5YR6/4 に近い橙色 外: 5YR5.6 明赤褐色	破損		
4	石器	磨石	破損	166.4	-	-	-	-	-	-	green	
5	石器	石錐	先端欠損	2.4	-	-	-	-	-	-	green	

※石器略号 green=緑色岩 green=花崗閃緑岩



第29図 SK06 出土遺物

第18表 SK06 出土遺物観察表

押出番号	種類	器種	残存	重量	型式	地文	成型形の特徴	胎土	色調	地成	材質	備考
1	陶文土器	深鉢	口縁~中	942.80	加勢利EⅡ群 ~IV	EⅢ群	口縁に数條線が走り、胴部は沈線によって区画され、区画外は縄文が磨り消される	白色粘 赤色粘	内: 10YR5/4 に近い黄褐色 外: 10YR5/3 に近い黄褐色	良好		
2	陶文土器	深鉢	口縁	130.30	加勢利EⅡ群 ~IV	EⅢ群	口縁に沈線が走り、以下縄文が施される	白色粘 黒色粘	内: 10YR6/4 に近い黄褐色 外: 7.5YR6/4 に近い橙色	良好		
3	陶文土器	深鉢	胴下字~底	696.10	加勢利EⅡ群 ~IV	EⅢ群	懸垂文が等間隔に施される	白色粘 赤色粘 黒色粘 透明粘	内: 7.5YR6/3 に近い褐色 外: 7.5YR5/4 に近い褐色	良好		
4	石器	磨石 磨石 磨石	一部欠損	36.10	-	-	-	-	-	-	-	直方体

第5章 まとめ

今回の調査では縄文時代中期、加曾利EⅢ～Ⅳ式期の竪穴建物跡4棟、土坑3基、炉を覆う貝層1か所が検出された。隣接する昭和56年(1981)実施の1次調査でも同時期の竪穴建物跡7棟が確認されており、それらは小型3棟、大型4棟で構成され、多くは貝層を有していた。貝層は今回検出されたものと同様の、炉を覆うように貝層が検出されたものもあることから今回の調査と一連の集落遺跡であると言える。

また、今回の調査区内からは、遺構に伴わないものの縄文時代後期の堀之内式・安行式の土器も出土している。1次調査でも堀之内式・安行式・加曾利B式が包含層から出土しており、本遺跡が縄文時代中期の集落が廃絶した後、後期に至り再度生活の場となっていたことが窺われる。

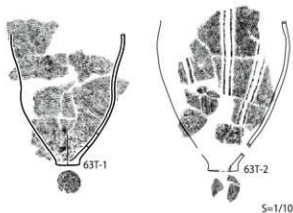
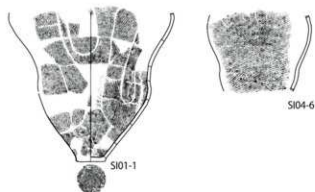
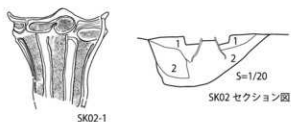
第1節 埋甕について

今回の調査では、埋甕が5か所検出された。1次調査では埋甕が確認されておらず、調査精度や方法に起因する可能性は残るが、明らかな相違点と言えるのである。

埋甕は特徴的な検出状況から、3つに分類することができる。まず、SK02で検出された埋甕は加曾利EⅢ式古段階の深鉢である。この遺物は逆位で土坑から検出され、底部は欠損しているが、上部は割れない状態で出土した。セクション図から第2層堆積時に埋められたことがわかる。

次に竪穴建物から検出された加曾利EⅣ式の深鉢2点である。2点は共に正位で埋められていたことが検出状況から判断でき、土圧により破損していることから埋められた時点では内側に空間があったと思われる。いわゆる胞衣甕であろう。

そして、60・63トレンチで検出された2点である。これらは確認調査時に取り上げられ、当初竪穴建物跡と想定されたが、トレンチの断面からも壁の立ち上がり等が確認できず、包含層遺物として掲載に至った。本トレンチから検出された土器2点の特筆すべきことは、斜めもしくは横位に埋められ、上記遺構内で検出された埋甕と同様に、遺物は土圧によって破損していることから内側には空間があったことが想定できる。埋甕は一般的



第30図 検出された埋甕

に埋葬施設であることが言われているが、今回調査では人骨の検出には至らなかった。

要約すると、土坑から逆位で検出された加曽利EⅢ式土器、堅穴建物跡床面下から正位で検出された加曽利EⅣ式土器、遺構に伴わず検出された加曽利EⅢ式土器の3類に分類でき、それぞれ異なる用途であったことが考えられるのではないだろうかと思定するが、断定するには土壌分析や周辺遺跡での類例を検討する必要がある。(橋邊)

第2節 SI02 覆土から検出された石鏃製作跡関連資料について(第31図)

石器類の集中箇所は、堅穴建物跡内や土坑内にしばしばみられるが、今回の調査においてSI02の覆土中より検出された石鏃製作跡について特筆する。この遺構内では覆土中から、石鏃完成品・未完成品・チップが出土しており、廃絶後に自然堆積の過程で石鏃の製作が行われていた可能性が考えられる。初めに堆積状態を確認したい。第16図は土層断面図、遺物の平面分布図、そして垂直分布図である。覆土は7層に分層され、壁付近は3・4層のように三角状堆積がみられる。また覆土中央には1・2層のようにレンズ状堆積が確認され、自然堆積であることを示している。次にチップの平面分布図であるが、チップ類は、堅穴内北東側に局所的に集中しているように見える(註1)。そしてチップ類の垂直分布だが、床面直上からの出土は少なく、堅穴使用時に石器製作を行ったわけではないようだ。またチップの分布は、床面より少々浮いた状態で出土し、1層、2層に沿った広がりを見せる。三角状堆積土中からのチップ検出はほぼない。

以上を踏まえて、堅穴廃絶後に上層が撤去され、覆土自然堆積の過程の中で落ち込みを利用して石鏃が製作されていた可能性がある。上記したことに付け加えて、加曽利Ⅲ～加曽利Ⅳ期において、同様の窪地または土坑を利用しての石器製作は、佐倉市池向遺跡に類例を見出すことができる。(高梨)

註1) チップのような小さな断片は、掘り手の認識によって出土数が左右されることを留意しなければならない。

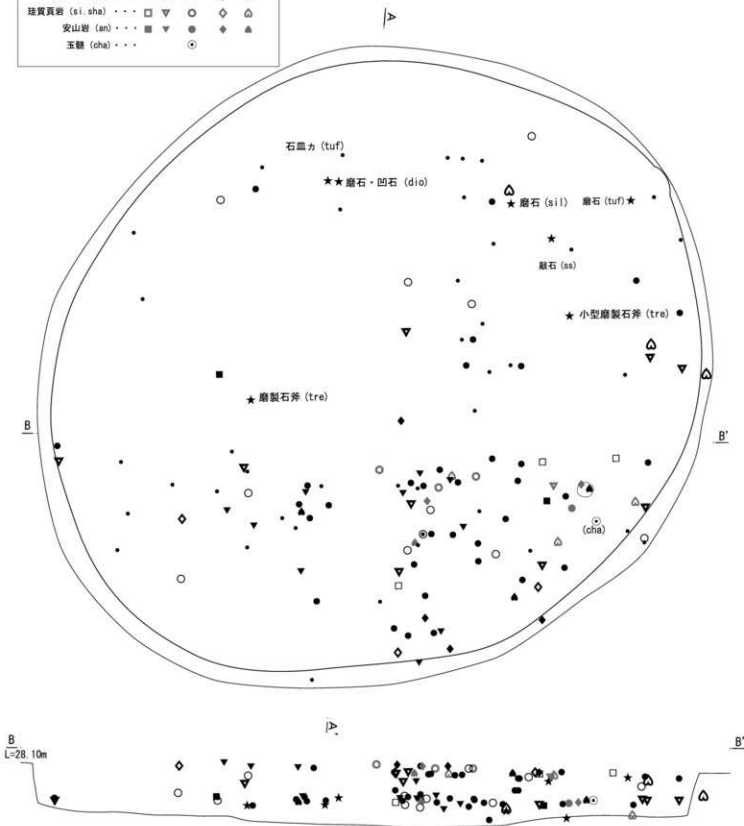
第3節 広ヶ作遺跡と加曽利貝塚

広ヶ作遺跡は学史的にも著名な加曽利貝塚の北東に位置し、坂月川を挟んだ対岸である。ここでは加曽利貝塚と広ヶ作遺跡を含む、坂月川周辺の貝塚について検討する。

加曽利貝塚は、南貝塚と北貝塚によって形成される大規模貝塚である。北貝塚は大型環状貝塚で、勝坂・阿玉台期から始まり、加曽利EⅠ・Ⅱ期が最盛期、その後の加曽利EⅢ期には減少傾向となる。一方、南貝塚の中期の様相は、勝坂・阿玉台期の遺構も確認されているが検出数は少なく、加曽利EⅢ～EⅣ期が主体となっている。昭和45・46年に行われた加曽利貝塚東傾斜面の第3次発掘調査では、遺構内投棄の貝ブロックを有する建物跡が多数検出されている。

広ヶ作遺跡の南東に隣接する滑橋貝塚では、列点環状に地点貝塚が検出された。时期的には加曽利EⅢ式からEⅣ式期が主体であり、広ヶ作遺跡と並行している。そして、加曽利貝塚とも並行する時期を含むことから、3遺跡は相互に関係の強い遺跡群(貝塚群)と考えられる。

やや視野を広げると、地点貝塚を有する中期の遺跡は、坂月川周辺では多い。具体的には中期前葉から中葉の遺跡のさら坊遺跡・蕨立遺跡、中期中葉の京願台遺跡、中期後葉から末葉の大作北遺跡・



第31図 SIO2石器分布図

加曾利貝塚西外縁部・滑橋貝塚・中薙遺跡・広ヶ作遺跡・台さら坊遺跡である。単純に時期別の遺跡数を見ると、中期後半以降に増加する傾向が読み取れるが、個々の遺跡の規模は小さくなるようである。もちろん未調査部分を考慮する必要があるだろうが、これを遺跡の分散として理解することも可能であろう。であれば広ヶ作遺跡は、まさにこの分散期に該当する遺跡の一つとして評価できる。

参考文献

- 1984 千葉市教育委員会『広ヶ作遺跡 調査報告』千葉市遺跡調査会
 1986 財団法人千葉県文化財センター『加曾利貝塚－県営板本第二建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』
 1990 青沼道文「千葉地域の縄文中期後半期遺跡の分布と立地 東京湾東岸における縄文中期終末期集落研究への指針」『貝塚博物館紀要 第17号』千葉市貝塚博物館
 2000 青沼道文「加曾利貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』
 2004 西野雅人「貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』
 2006 財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター『千葉市花輪貝塚－平成15年発掘調査報告－』千葉市教育委員会
 2006 柳澤清一『縄文時代中・後期の編年学研究：列島における詳細別編年網の構築を目指して』千葉大学考古学研究会叢書3
 2008 小林達夫『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会
 2020 西野雅人『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書 一令和元年度－』千葉市教育委員会

第19表 遺構一覧表

遺構名	位置	トレンチ 番号	平面形状	規模	柱穴	出土遺物	特徴	重複遺構
S101	1区 南東	65E	楕円	長軸(3.3m) 短軸 1.2m 深さ 10cm	11	加曾利瓦葺	確認調査時に北壁付近より埋没出土	
S102	3区 中央	36E	長楕円	長軸 5.75m 短軸 5.93m 深さ 60cm	18	加曾利瓦葺	ミコトニア土器・土器片散 埴物発給後に石造製作か	
S103	5区 北北西	17E	長楕円	長軸 3.0m 短軸 2.76m 深さ 45cm	2	加曾利瓦葺	土器(黒い・中・赤り石・石皿) 瓦層を有す	
S104	6区 北西	18E	楕円	長軸 3.35m 短軸 2.5m 深さ 30cm	無し	加曾利瓦葺	南壁付石埋構	S03・S06を切る
S01	S103へ変更							
S02	4区 調査区中央 やや北	31E	長楕円	長軸 1.54m 短軸 0.96m 深さ 47cm	—	加曾利瓦葺	底部欠損の埋没が忠位で検出	
S03	6区 北西	18E	楕円	長軸(2.0m) 短軸(0.95m) 深さ 25cm	—	加曾利瓦葺	石造・磨石	S104に切られる
S04	2区 調査区南	63E・ 60E	楕円長方形	長軸 1.11m 短軸 0.77m 深さ 20cm	—	加曾利瓦葺～IV	土器片・磁瓦片磨り石	
S05	2区 調査区南	63E・ 60E	不整形楕円	長軸 0.77m 短軸 0.43m 深さ 21cm	—	加曾利瓦葺	土器片1点	
S06	6区 調査区北西	18E	楕円	長軸(1.15m) 短軸(1.0)m 深さ 47cm	—	加曾利瓦葺	磨石	S104に切られる
S07	S104へ変更							
台石層	2区 調査区南	63E・ 60E	—	—	—	—	埋没2点検出	

第4節 貝サンプルの分析結果

1 概要

縄文時代の土坑（小堅穴）のSK01の覆土内貝層をサンプリングして分析を行った。採取量は、貝層の全量306リットルであり、前年度の確認調査で採取したものと、本調査で層別に採取したのものがある（第1表）。分析及び保管の対象としたのは、本調査で採取したうちの35リットルである。水洗時に10リットルごとに区分し、第一合成社のウォーターセパレーション（フルイの目5・2.5・1mm）を使用して水洗した後、乾燥している際に分析対象を抽出した。貝種やサイズに顕著な差が認められたため、それぞれの特徴をもつものを選んで各フルイの半分を取り出した。これにより1単位5リットル×7単位、計35リットルが分析対象である。これ以外については、5mmフルイのみ人工造物や動物骨などを回収した。貝類については、サンプルに含まれない種を抽出して種名表に加えた。残り貝殻は保存状態の良いものを標本・普及用として保管し、それ以外は廃棄した。なお、当遺跡では過去の調査でも貝類の分析が行われている。昭和56年調査分については報告書（武部・安藤1984）に所収されたが（奥谷1984）、保管されていた未分析のサンプルと

昭和62年調査分について最近報告している（西野2020）。分析を行った貝層は、全体で住居跡7軒、小堅穴1基、不明遺構1基となる。時期はすべて加曽利E式後半で、ほぼ加曽利EⅢ式期とみられる。

貝類は、原則5mm以

上、イボキサゴは2.5mm以上から抽出し、巻貝類は殻軸の下端、二枚貝類は殻頂部を同定・集計し、サイズの計測が可能な個体が多い種について最大200個を計測した。なお、微小貝類は分析対象外とした。動物骨、炭化種子等は含まれていなかった。

第1表 貝サンプル一覧

名称	採取単位	ラベル	採取量	リットル	カット名	分析量	備考
SK01	確認	カニン	土藪5	51	—	0	確認調査で一括採取
					1層	SK01①	土藪13
					1層a	5	
					1層b	5	
					1層c	5	
					1層d	5	
	2層	SK01②	土藪12	120		10	層別採取
					2層a	5	
					2層b	5	
	土器中	SK01③	土藪1	8	土器	5	2層中の土器
合計	4区分			306	リットル	35	リットル

第2表 貝類種名一覧

腹足綱	原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	<i>Umbonium (Stadium) mouliiferum</i>	
		リュウテンサザエ科	スガイ	<i>Lunella coronata coreanica</i>	
中腹足目		ウミナシ科	ウミナシ科	<i>Potamididae sp.</i>	
		タマガイ科	ツメタガイ	<i>Glaucolax edyma</i>	
新腹足目		アウキガイ科	アカニシ	<i>Rapana venosa</i>	
			イボニシ	<i>Thais (Reishia) clavigera</i>	
		ムシロガイ科	アラムシロ	<i>Rottmannia festiva</i>	
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	サルボオ	<i>Scapharca subcrenata</i>	
			ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>	
	ウグイスガイ目		タマガイ科	タマガイ	<i>Glycymeris vestita</i>
			ナミマガシワ科	ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis</i>
			イタボガキ科	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
	マルスダレガイ目		イタボガキ	イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i>
			ハカガイ科	シオフキ	<i>Maetra quadrangularis</i>
			ニッコウガイ科	サビシナトリ	<i>Nacoma costabulata</i>
			シジミ科	ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
			マルスダレガイ科	ハマグリ	<i>Meretrix luoria</i>
		アザリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>		
		カガミガイ	<i>Phacocosa japonicum</i>		
		オキシジミ	<i>Cyclina stenosai</i>		
		オオノガイ	<i>Mya arenaria oonagai</i>		
計	15科		21種		

*はサンプル外のみ

2 分析結果

貝種組成 同定した貝類は、15科21分類群の10,340個体である(第2・3表)。当遺跡の分析で今回追加されたのはイボニシ、ハイガイ、タマキガイ、サビシラトリ、ナミマガシワである。貝種組成(第4表)を全体でみると、イボキサゴが82.6%と圧倒的に多く、つぎに多いハマグリが7.2%と続く。この2種が主要な採取対象であったといえる。マガキ、アサリ、シオフキの3種も比較的多くまわっており、それ以外は少ない。サンプルごとにみても、イボキサゴが中心であるが、1層では二枚貝4種(ハマグリ、マガキ、アサリ、シオフキ)が比較的多く、サンプル間の差が大きい。1層は複数の廃棄によるものであり、干潟の先端で行うイボキサゴ漁のほか、河口部でこれらの採取が行われたと考えられる。少ない貝種のなかでは、オキシジミやサルボオも時折採取したものとみられる。アラムシロとウミナ科はイボキサゴのかご漁で混獲したものと考えられるが、通常より混入率がかなり

第3表 同定結果

種名	No.	1層a	1層b	1層c	1層d	2層a	2層b	土器	合計
イボキサゴ	195	862	323	131	1652	3205	2169		8537
スガイ	1	1		1					3
ウミナ科	13	8	6		7	17	4		55
ツメタガイ		1	1	1			2		5
アカニシ	1	2							3
イボニシ	4	2	1	1					8
アラムシロ	1	15	7		32	33	22		110
サルボオ	7	7	4	7	1	1			27
ハイガイ	1	1	2	1					5
タマキガイ	1								1
マガキ	140	41	44	45	1	1	3		275
イタボガキ		1	1						2
シオフキ	33	52	109	15	14	9	11		243
サビシラトリ		1	1						2
ヤマトシジミ		1							1
ハマグリ	88	135	111	38	157	102	115		746
アサリ	23	53	40	7	54	36	42		255
カガミガイ	1	1							3
オキシジミ	18	17	13	9			1		58
オオノガイ		1							1
合計		527	1202	663	256	1918	3406	2368	10340
水洗前体積(L)		5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	35.0
微小貝		79	88	182	10	85	49	43	496

低い。

計測値分布 イボ

キサゴの殻径平均±

標準偏差は13.8±

1.1mmである。13.5

mmから15.0mm程度

のものが中心で、

12.5mm～13.0mmも

比較的多く、サンブ

ル間の差は小さい。

この時期のイボキサ

ゴのサイズは遺跡間

でばらつきが大きい

ことが特徴である。

今回のデータは比較

的粒揃いといえる。ハマグリは殻長は 32.3 ± 6.5 mmである。中心が30mm～35mmであることは全サンプルに共通するが、1層bは大・小の両方に、2層bと土器は小側に広がっており、大きさのばらつきやサンプルによる差が大きい。この時期のハマグリの利用は、平均的には大型貝塚を形成した加曽利E式前半よりもやや大きいものが混じるが、大きさにこだわらず小さくても採取する傾向があり、今回も同様であった。ただし、幼貝が多い1層b、2層b、土器はいずれもイボキサゴの割合が高いので、一部はイボキサゴのかご漁に伴って混獲されたものであろう。

その他の二枚貝については、マガキの殻高は 43.9 ± 10.7 mm、アサリの殻長は 29.8 ± 6.5 mm、シオフキの殻長は 31.0 ± 3.5 mmであった。マガキは小さめで比較的粒ぞろいである。アサリは幼貝が多く混じり、小さくても採取する傾向がつよい。シオフキは幼貝が混じっておらず、大き目なら採取したのであろう。前回の分析でもアサリの平均は26.5mmとさらに小さく、同様の傾向がうかがえる。

マガキの付着痕 比較的多いマガキが多いサンプルで左殻の付着痕を観察したところ、マガキ同士が多かった。あまり大きなものは見られないので、小規模なカキ礁で採取されたものが多いと推定される。

第4表 貝種組成

種名	No.	全体	%	1層計	1層a	1層b	1層c	1層d	2層計	2層a	2層b	土器
イボキサゴ		8537	82.6%	1511	195	862	323	131	4857	1652	3205	2169
ハマグリ		746	7.2%	372	88	135	111	38	259	157	102	115
マガキ		275	2.7%	270	140	41	44	45	2	1	1	3
アサリ		255	2.5%	123	23	53	40	7	90	54	36	42
シオフキ		243	2.4%	209	33	52	109	15	23	14	9	11
他		284	2.7%	163	48	59	36	20	93	40	53	28
合計		10340	1	2648	527	1202	663	256	5324	1918	3406	2368

他の内訳

アラムシロ	110	1.1%	23	1	15	7			85	32	33	22
オキシジミ	58	0.6%	57	18	17	13	9					1
ウミナホ	55	0.5%	27	13	8	6			24	7	17	4
サルボオ	27	0.3%	25	7	7	4	7		2	1	1	
イボニシ	8	0.1%	8	4	2	1	1					
ツメタガイ	5	0.0%	3	1	1	1	1		2		2	
ハイガイ	5	0.0%	5	1	1	2	1					
スガイ	3	0.0%	3	1	1		1					
アカニシ	3	0.0%	3	1	2							
カギムガイ	3	0.0%	2	1	1							1
イタボガキ	2	0.0%	2		1		1					
サビシラトリ	2	0.0%	2		1		1					
タマキガイ	1	0.0%	1	1								
ヤマトシジミ	1	0.0%	1		1							
オオノガイ	1	0.0%	1		1							

第5表 計測値分布

イボキサゴ殻径

mm	全体	1層b	2層a	2層b	土器
-9.0					
-10.0					
-11.0	2	2			
-12.0	26	13	5	5	3
-13.0	157	52	46	25	34
-14.0	305	78	94	69	74
-15.0	217	47	51	55	64
-16.0	58	8	9	20	21
-17.0	23		5	15	3
-18.0	10			9	1
-19.0	2			2	
-20.0					
-21.0					
試料数	800	200	200	200	200
平均	13.81	13.39	13.66	14.27	13.91
標準偏差	1.12	0.98	0.96	1.36	0.93

ハマグリ殻長

mm	全体	1層b	1層c	2層a	2層b	土器
-10.0	1	1				
-15.0	13	1		9	3	
-20.0	16	3		5	2	6
-25.0	17	3	1	3	6	4
-30.0	83	18	14	12	20	19
-35.0	213	45	41	58	32	37
-40.0	114	27	19	34	12	22
-45.0	28	5	3	12	1	5
-50.0	9	1	2	3	2	1
-55.0	1	1				
-60.0	1	1				
-65.0						
-70.0						
試料数	494	106	80	127	84	97
平均	32.30	32.99	33.45	33.79	29.07	31.45
標準偏差	6.50	6.57	4.41	5.74	7.51	6.85

マガキ殻高

mm	1層
-20.0	
-25.0	3
-30.0	6
-35.0	13
-40.0	28
-45.0	27
-50.0	26
-55.0	16
-60.0	5
-65.0	4
-70.0	3
-75.0	
-80.0	1
試料数	133
平均	43.91
標準偏差	10.74

アサリ殻長

mm	全	シオフキ殻長
mm	1層	
-10.0		-10.0
-15.0	14	-15.0
-20.0	7	-20.0
-25.0	8	-25.0
-30.0	45	-30.0
-35.0	91	-35.0
-40.0	26	-40.0
-45.0	3	-45.0
-50.0		-50.0
-55.0		-55.0
-60.0		-60.0
-65.0		-65.0
-70.0		-70.0
試料数	194	試料数 104
平均	29.83	平均 31.00
標準偏差	6.45	標準偏差 3.48

選別量 30リットル

種名	個数	サイズ
イボキサゴ	243	別表1
ハマグリ	21	別表2
マガキ	7	別表2
アサリ	7	別表2
シオフキ	6	別表2
アラムシロ	3	計測なし
ウミナホ	1	計測なし
オキシジミ	1	計測なし
合計	289	

第6表 標準貝類相

1リットルあたりの標準的種サイズ組成

別表1	別表2	ハマグリ	マガキ	アサリ	シオフキ
イボキサゴ					
個数					
-11.0	1				
-12.0	8				
-13.0	48				
-14.0	92				
-15.0	66				
-16.0	18				
-17.0	7				
-18.0	3				
合計	242				
-15.0		1			
-20.0		1			
-25.0		1			
-30.0		3			
-35.0		9			
-40.0		5	1		
-45.0		1	2		
-50.0			1		
-55.0			1		
合計		15	7	7	6

標準貝類相 貝サンプル1リットル当たりの標準的な組成、サイズを復元したものであり、イボキサゴが243個、ハマグリ21個、マガキ7個、アサリ7個、シオフキ6個、アラムシロ3個、ウミニナ科1個、オキシジミ1個となった（第6表、写真1）。

3 小結

利用された貝種のほとんどは内湾の干潟から浅瀬に生息するものであり、わずかに湾奥泥底に生息するマガキ、オキシジミなどが混じる。魚類遺体は今回も皆無であった。当遺跡は都川水系の支谷の最奥部に位置し、海岸へのアクセスに恵まれない立地であるにも関わらず、活発に貝類を採取している。魚の主体はイボキサゴ漁である。イボキサゴを効率よく採取できるのは干潟の先端から浅瀬であり、行き帰りにやや集落に近い干潟の途中や河口でハマグリやマガキ、アサリ、シオフキを採取したが、魚の漁は行っていなかった。遠距離を移動して海岸に通う目的はもっぱら貝の入手であったとみることができる。

参考文献

奥谷壽司 1984「貝類の鑑定」『広々作遺跡』千葉市遺跡調査会

武部喜充・安藤杜夫 1984『広々作遺跡』千葉市遺跡調査会

西野雅人 2020「千葉市内主要貝塚資料分析報告（2）」貝塚博物館紀要 46



写真1 標準貝類相

写真図版



1. 確認調査前風景 北西から



2.1 区 65 トレンチ SI01 炉検出状況 北西から



3.2 区 65 トレンチ SI01 検出及び拡張状況
南東から



4.2 区 63 トレンチ SK04・05 検出状況
北西から



5.2 区 63 トレンチ 拡張状況 北から



1.3区 36 トレンチ SI02 検出状況 北西から



2.3区 36 トレンチ SI02 拡張状況 南から



3.4区 31 トレンチ SK02 検出状況 北西から



4.5区 17 トレンチ SI03 検出状況 北西から



5.5区 17 トレンチ 拡張状況 南から



6.6区 18 トレンチ SI04 検出状況 北西から



7.6区 18 トレンチ 拡張状況 北西から



8.6区 18 トレンチ 拡張状況 北西から



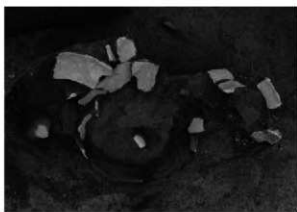
1. 本調査前風景 北西から



2. 1区65トレンチ 遺構検出状況 北西から



1.1区65トレンチ 遺物出土状況 北から



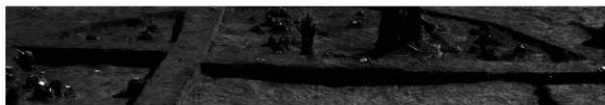
2.1区65トレンチ 埋甕出土状況 北から



3. 1区SI01 完掘状況 西から



4.1区SI01 Aセクション 西から



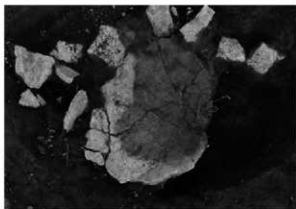
5.1区SI01 Bセクション 北から



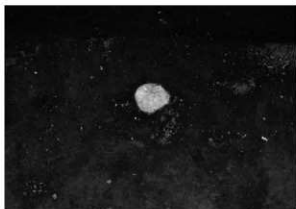
1.2区60・63トレンチ 遺構検出状況 北西から



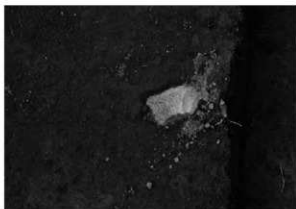
2.2区60・63トレンチ 埋甕出土状況(1)
北西から



3.2区60・63トレンチ 埋甕出土状況(2)
北西から



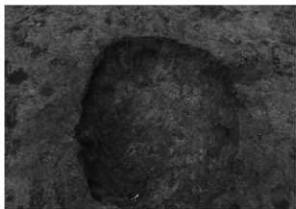
4.2区60・63トレンチ 遺物出土状況(1)
北から



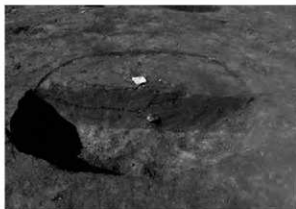
5.2区60・63トレンチ 遺物出土状況(2)
南東から



1.2区包含層 完掘状況 北から



2.2区SK04 完掘状況 東から



3.2区SK04 セクション 南から



4.2区SK05 完掘状況 東から



5.2区SK05 セクション 西から



1.3区36トレンチ 遺構検出状況 北西から



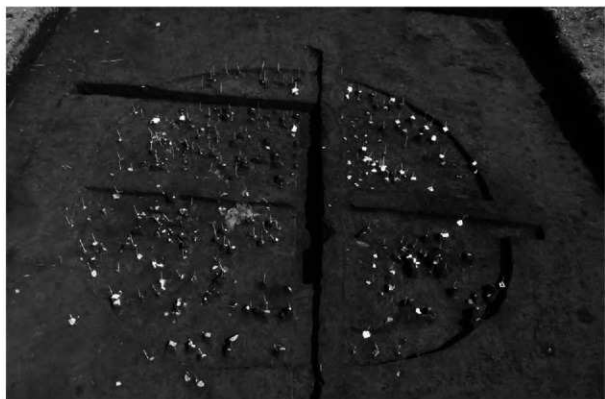
2.3区SI02 完掘状況 南から



1.3区 SI02 Aセクション 西から



2.3区 SI02 Bセクション 南から



3.3区 SI02 遺物出土状況(1) 西から



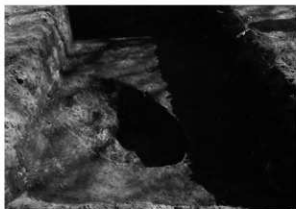
4.3区 SI02 遺物出土状況(2) 東から



5.3区 SI02 遺物出土状況(3) 北から



1.4区31 トレンチ 遺構検出状況 南東から



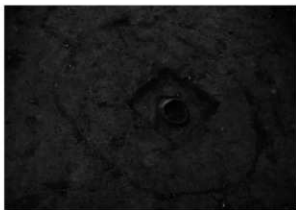
2.4区SK02 完掘状況 北から



3.4区SK02 セクション 東から



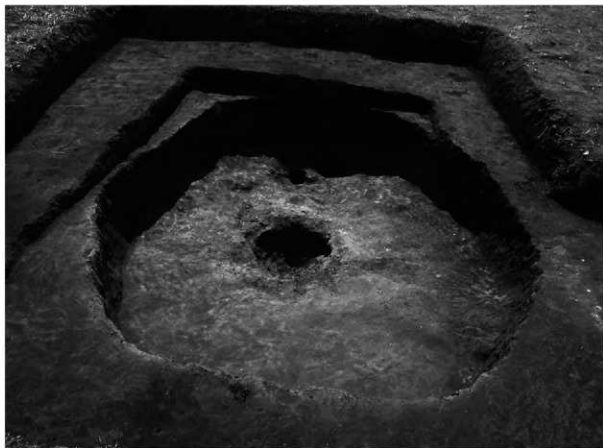
4.4区SK02 埋甕出土状況 南東から



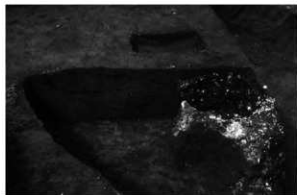
5.4区 検出状況 南から



1.5区 17 トレンチ 遺構検出状況 南東から



2.5区 S103 完掘状況 北から



1.5区 SI03 Aセクション 南から



2.5区 SI03 Aセクション 北から



3.5区 SI03 Bセクション 東から



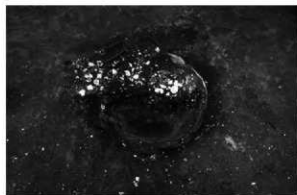
4.5区 SI03 Bセクション 西から



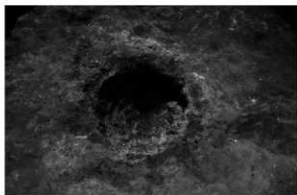
5.5区 SI03 貝出土状況 西から



6.6区 SI03 埋甕出土状況(1) 北から



7.5区 SI03 埋甕出土状況(2) 南から



8.5区 SI03 炉完掘状況 北から



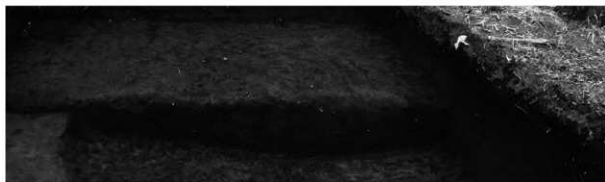
1.6区 18トレンチ 遺構検出状況 北西から



2.6区 S104・SK03・SK06 完掘状況 北から



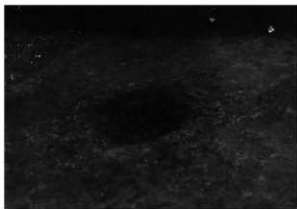
1.6区 SI04 Aセクション 東から



2.6区 SI04 Bセクション 北から



3.6区 SI04 炉 セクション 西から



4.6区 SI04 炉 完掘状況 東から



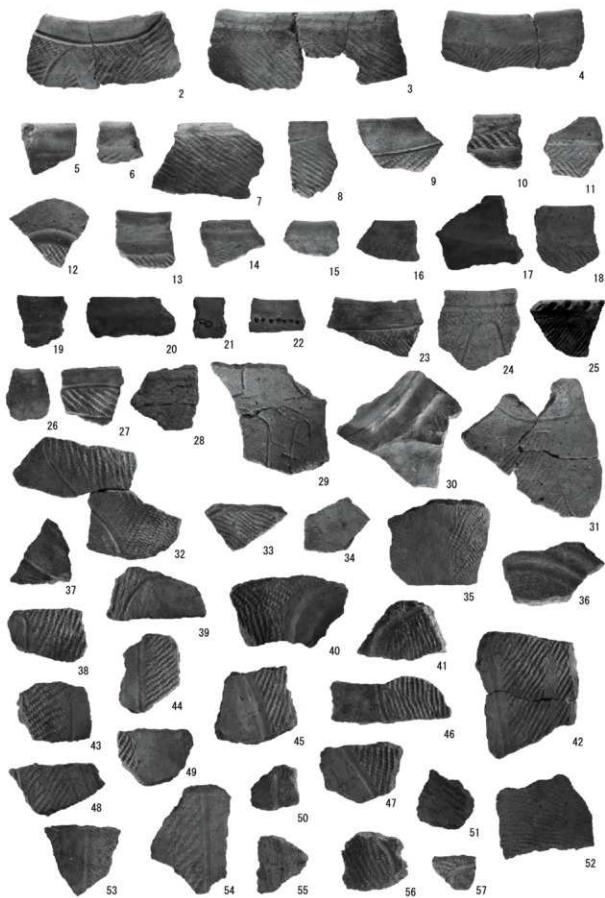
5.6区 SI04 埋葬出土状況 北から



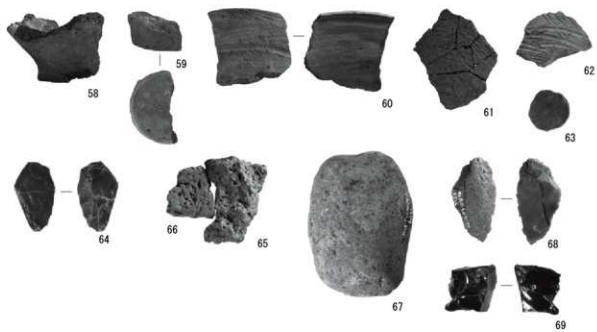
6.6区 SI04 遺物出土状況 東から



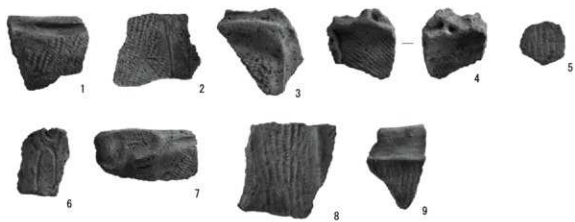
1区 S101 出土遗物 (1)



1区 S101 出土遗物 (2)



1区SI01出土遗物(3)



2区包含層出土遺物



2区SK04·05出土遺物



1



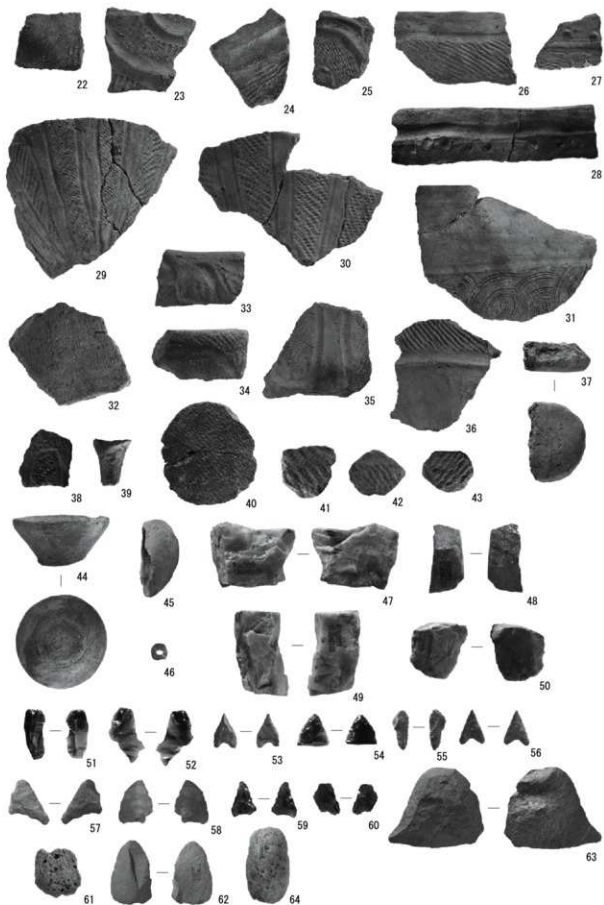
2区63トレンチ出土遺物(1)



2区63トレンチ出土遺物(2)



SI02 出土遺物 (1)



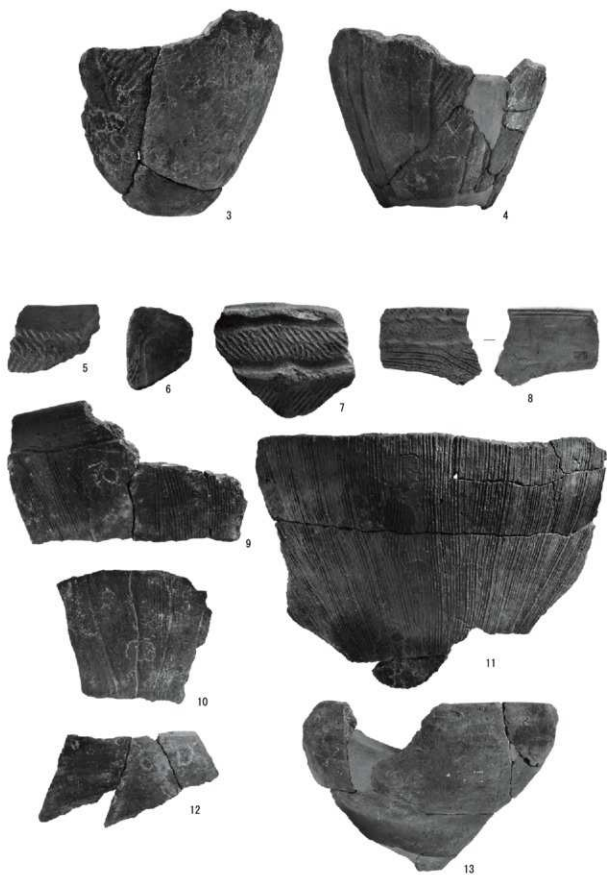
SI02 出土遺物 (2)



4区 SK02 出土遗物



5区 S103 出土遗物 (1)



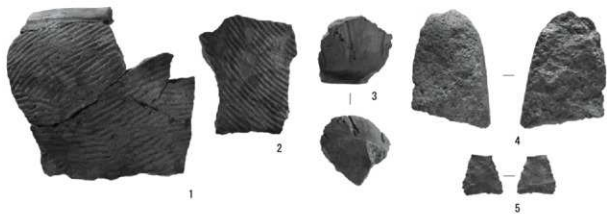
5区 S103 出土遗物 (2)



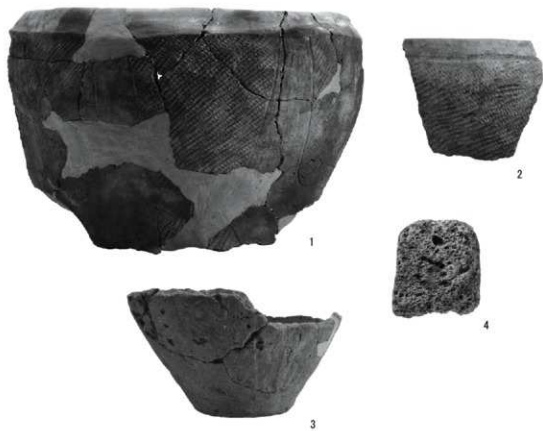
5区 S103 出土遺物 (3)



6区S104出土遗物



6区 SK03 出土遗物



6区 SK06 出土遗物

抄 録

ふりがな	ちばしひろがさくいせき							
書名	千葉市広ヶ作遺跡							
副書名	令和元年度発掘調査報告書							
編著者名	大賀 健 橋邊明子 大賀琢磨 高橋 豪							
編集機関	千葉市教育委員会 株式会社 勾玉工房							
発行機関	千葉市教育委員会 〒260-8722 千葉県千葉市中央区千葉港1番1号							
発行年月日	2023(令和5)年 9月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / ''	° / ' / ''			
ひろがさくいせき 広ヶ作遺跡	ちばけん ちばし 千葉県千葉市 若葉区小倉町 1758-1ほか	12104	3116	35° 37' 53''	140° 10' 01''	2020.03.02 ～03.31	254㎡	住宅造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
広ヶ作遺跡	集落	縄文時代 中期～後期	竪穴住居跡4軒 土坑3基	縄文土器(加曾利EⅢ～IV式) 石鏃、石皿、石斧、石棒 貝		広ヶ作遺跡は、加曾利EⅢ式からEⅣ式期の遺構内貝塚を有する集落である。埋甕や石鏃が多く検出され石鏃については、工房跡の可能性もある。		

千葉市広ヶ作遺跡

— 令和元年度発掘調査報告書 —

2023年9月29日印刷

2023年9月29日発行

- 編 集** 千葉市教育委員会
〒260-8722 千葉県千葉市中央区千葉港1番1号
℡043 (245) 5962
株式会社 勾玉工房
〒286-0211 千葉県富里市御料1009番地28号
℡0476 (92) 0658
- 発 行** 千葉市教育委員会
〒260-8722 千葉県千葉市中央区千葉港1番1号
℡043 (245) 5962
- 印 刷** 株式会社 エイティー
〒289-1115 千葉県八街市八街4211番地
℡043 (444) 2024